

# 平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡

2016年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、道路整備工事に伴う平安京跡・御土居跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成28年3月

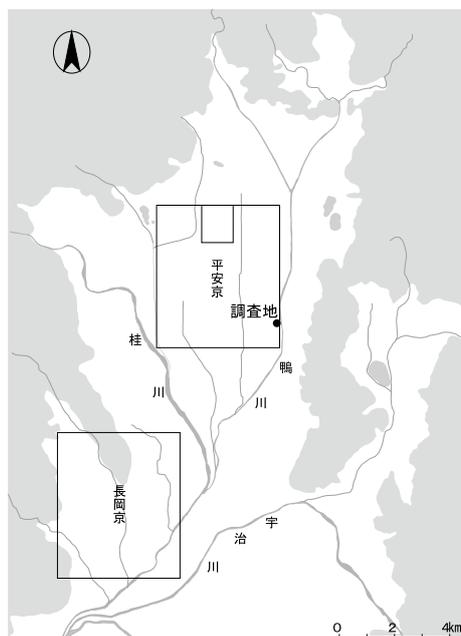
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・御土居跡（文化財保護課番号 12 H 335）
- 2 調査所在地 京都市下京区郷之町ほか地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2015年8月17日～2015年9月25日
- 5 調査面積 約162㎡
- 6 調査担当者 近藤章子・金島恵一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 近藤章子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 第1面	11
(3) 第2面	17
(4) 第3面	17
4. 遺 物	18
(1) 遺物の概要	18
(2) 土器類	18
(3) その他の遺物	21
5. ま と め	23

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（西から）
		2	第2面西半全景（西から）
図版2	遺構	1	地鎮25遺物出土状況（南から）
		2	土坑13（南から）
		3	園池23（北から）
図版3	遺構	1	石垣20（北東から）
		2	舟入6（南西から）

# 挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（東から）	2

図4	調査前樹木伐採風景（東から）	2
図5	重機掘削風景（南から）	2
図6	調査風景（南東から）	2
図7	周辺調査位置図（1：2,500）	5
図8	西壁断面図（1：50）	9
図9	南壁断面図（1：100）	10
図10	遺構平面図（1：150）	12
図11	建物1実測図（1：50）	13
図12	地鎮25実測図（1：20）	14
図13	土坑13実測図（1：50）	14
図14	石垣20及び舟入6西護岸実測図（1：50）	15
図15	建物2礎石6～9実測図（1：50）	16
図16	園池23実測図（1：50）	16
図17	舟入6出土土器実測図（1：4）	19
図18	園池23・その他の遺構出土土器実測図（1：4）	20
図19	土製品拓影・実測図（1：2）	21
図20	砥石実測図（1：4）	22
図21	砥石	22
図22	銭貨拓影、金属製品実測図（1：2）	22
図23	調査区及び現高瀬川東西方向断面図（1：200）	23
図24	明治4年調査地付近図	24

## 表 目 次

表1	周辺調査一覧表	6
表2	遺構概要表	11
表3	遺物概要表	18
表4	土器類一覧表	26
表5	その他の遺物一覧表	27

# 平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡

## 1. 調査経過 (図1～6)

本調査は、崇仁北部第二地区区画整理事業（崇仁北部第四地区住宅地区改良事業）道路整備工事に伴う発掘調査である。調査は京都市より委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下「京都市埋文研」という）が実施した。調査地点は、平安京左京八条四坊九町跡及び御土居跡に相当する。

九町では平安時代の文献史料による居住者は知られていない。南西約200m地点での調査（図7-44調査）では、平安時代や鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、当地でも遺構・遺物の検出が想定された。また、御土居は豊臣秀吉により築造された、京都の周囲に巡らされた土塁と堀からなる大規模施設である。御土居の一部は、江戸時代前期に付け替えられたとされ、当該地点で南北方向から西折するとされる。西約120m地点の調査（図7-70調査）では、付け替えられた東西方

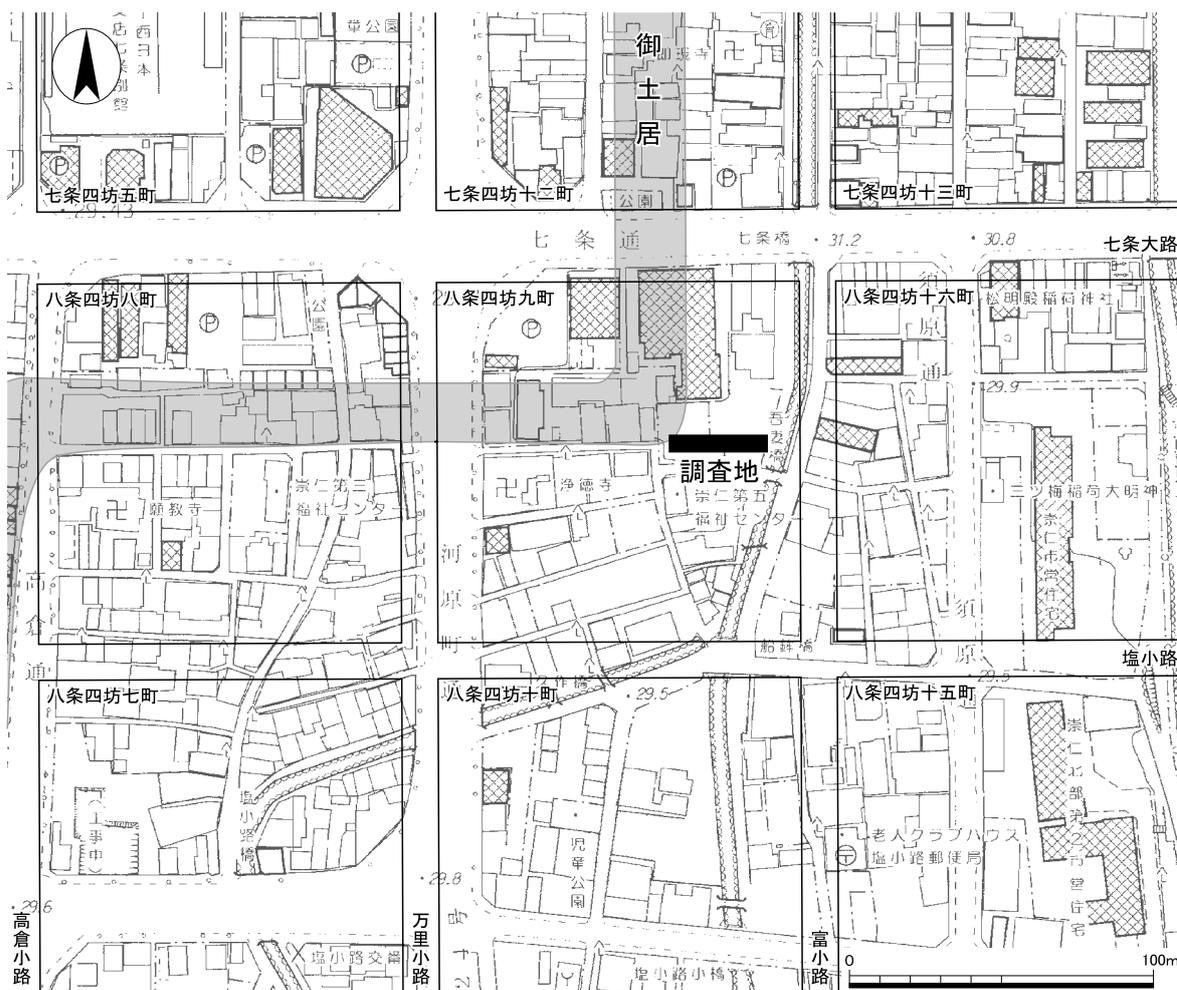


図1 調査地位置図 (1:2,500)

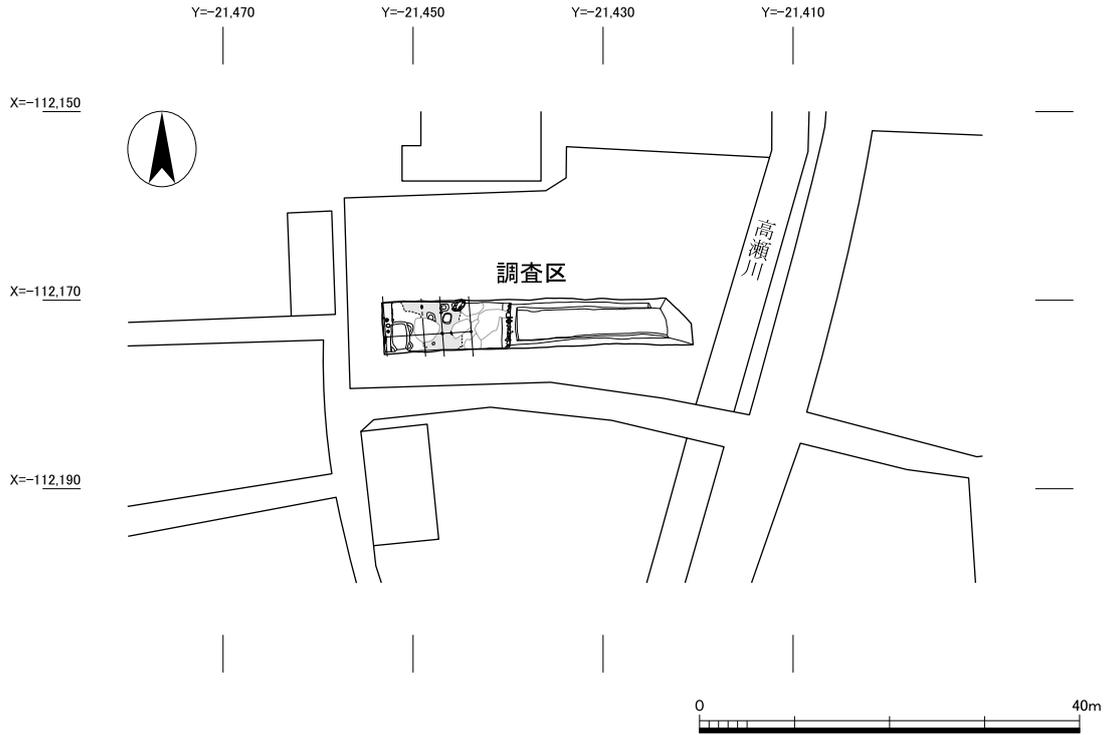


図2 調査区配置図 (1 : 800)



図3 調査前全景 (東から)



図4 調査前樹木伐採風景 (東から)



図5 重機掘削風景 (南から)



図6 調査風景 (南東から)

向を示す御土居の土塁基底部が検出されている。今回の調査では、平安時代から桃山時代の遺構のほか、御土居跡の検出を目的とした。

調査区は道路建設予定地内に設定した。東端部には障害物があったため、調査面積は約162㎡となった。調査は、重機掘削から開始した。残土は調査区北側に仮置きし、調査終了後、埋め戻した。

調査では、調査区中央付近で石垣など護岸施設、東半では池状遺構（絵図などによれば、高瀬川の舟入の蓋然性が高い。以下「舟入」という）、西半では江戸時代の建物、園池などを検出した。

遺構の基盤層となる砂礫層は鴨川の氾濫堆積物である。堆積状況と下層遺構の有無を確認するため、調査区中央と西端で断割調査を行った。結果、遺構は検出できなかったが、中世から江戸時代の遺物を採取した。調査は2面に分け、各調査面で図面類作成、全景・個別遺構写真撮影などを行った。

調査の進展に伴い適宜、文化財保護課の臨検を受けた。また、当事業における検証委員である龍谷大学の國下多美樹教授、同志社大学の若林邦彦准教授の視察を受けた。なお、調査中には付近住民の方々の見学を随時受け入れた。

## 2. 位置と環境

### (1) 遺跡の位置と環境

調査地点はJR京都駅烏丸口から北東へ約600m、七条通の南、河原町通－須原通間に位置し、南流する高瀬川に西接する。また、平安京内の南東部、左京八条四坊九町にあたり、九町内の中央、東寄りに位置する。また、東方約600mの地点には鴨川が南流する。鴨川の西岸域は、氾濫原で砂礫層が厚く堆積する地域である。

周辺には奈良時代以前の遺跡は知られていない。また、高倉小路以東の八条四坊七町から十六町には平安時代の居住者を記述した史料はない<sup>1)</sup>。

一方、高倉通以西の三坊一帯には、平安時代後期から中世には、手工業者が多く居住する八条院町や、七条町などが形成され、手工業生産や経済活動の一大拠点となる。

桃山時代には、豊臣秀吉による京都都市改造の一環として、天正19年（1591）に御土居が築造される。調査地点は御土居外東辺部に位置する。御土居は、外敵からの防御と鴨川の水害から市街地を守る施設として築かれた。範囲は、西は紙屋川、北は鷹ヶ峰、東は鴨川、南は九条で界され、東西3.5km、南北8.5km、総延長22.5kmに及ぶ。これにより、京都は洛中と洛外が明確に分けられることとなった。京内外の出入口となる開口部は、当初は十口あったとされる。

江戸時代になると、御土居は開口部の新設や土塁の削平また堀の埋め立てなどにより、姿を変えていく。東辺部では六条通－七条通間で御土居の付け替えがあったことが、江戸時代の古地図研究などから指摘されている<sup>2)</sup>。寛永18年（1641）の東本願寺別邸である涉成園造営を契機として付け替えられたと考えられている。北東から南西に斜行していた御土居は、涉成園敷地東側に南北方向

に付け替えられ、七条通の南側で西折し、高倉通付近で造営時の御土居に接続する。さらに、角倉了以により慶長19年(1614)、御土居に沿って開削された高瀬川は、御土居付け替えと共に流路変更がなされ、付け替え後の御土居東縁に沿って南流する。

江戸時代中期以降、河原町通から鴨川間の五条通－七条通の一带では、新地開発を契機に、御土居の土塁削平や鴨川河原地の集落立ち退きなどが行われた。六条村は、五条通－六条通間の河原地に位置したが、宝永4年(1707)、七条通の南側に移転する<sup>3)</sup>。今回の調査地点は、六条村移転地に位置する。

明治10年(1876)には、神戸－京都間に鉄道が開通し、現在の京都駅よりやや北側に初代京都駅(七条停車場)が造られた。その後、路面電車、京阪電気鉄道なども開通した。交通・輸送手段は鉄道へと移行し、高瀬川の水運機能は大正9年(1920)に終える。

## (2) 周辺の調査(図7、表1)

左京七条四坊五・六町、十一～十四町、八条四坊六～十一町、十四～十六町の調査について地点図、一覧表を掲載した。立会・試掘調査のうち、遺構面まで達しない調査地点は省略した。

古墳時代以前では、八条四坊八町(70調査)の鴨川洪水砂礫層より、縄文時代中期前半・晩期の土器が2点出土した。その他、明瞭な遺構・遺物は未検出である。

平安時代の遺構は、八条四坊七町(44調査)では、砂礫層上面で平安時代後期の遺構が検出された。

中世の遺構は、七条四坊十二町(18調査)、七条大路(23調査)、八条四坊七町(44調査)で検出された。18調査では室町時代の遺物包含層、23調査では七条大路の路面がある。44調査では平安時代の遺構が洪水層に覆われた上面で鎌倉時代の井戸が検出されており、鎌倉時代にも宅地化した状況が確認された。

近世の遺構は、各地点で検出されている。御土居に関連する遺構は前掲の八条四坊八町(70調査)で付け替えられた土塁の基底部が検出された。また、名勝渉成園内(38調査)では、池の中島造成時の積土と渉成園造営前の鴨川の氾濫堆積層が検出されている。中島は築造時の御土居の名残ともいわれており、検出された積土は土塁部分の可能性が考えられる。八条四坊七町(44・51調査)では、旧高瀬川が検出された。

その他、砂礫層や流れ堆積層が各調査で検出され、鴨川の旧河道や洪水層と考えられる。

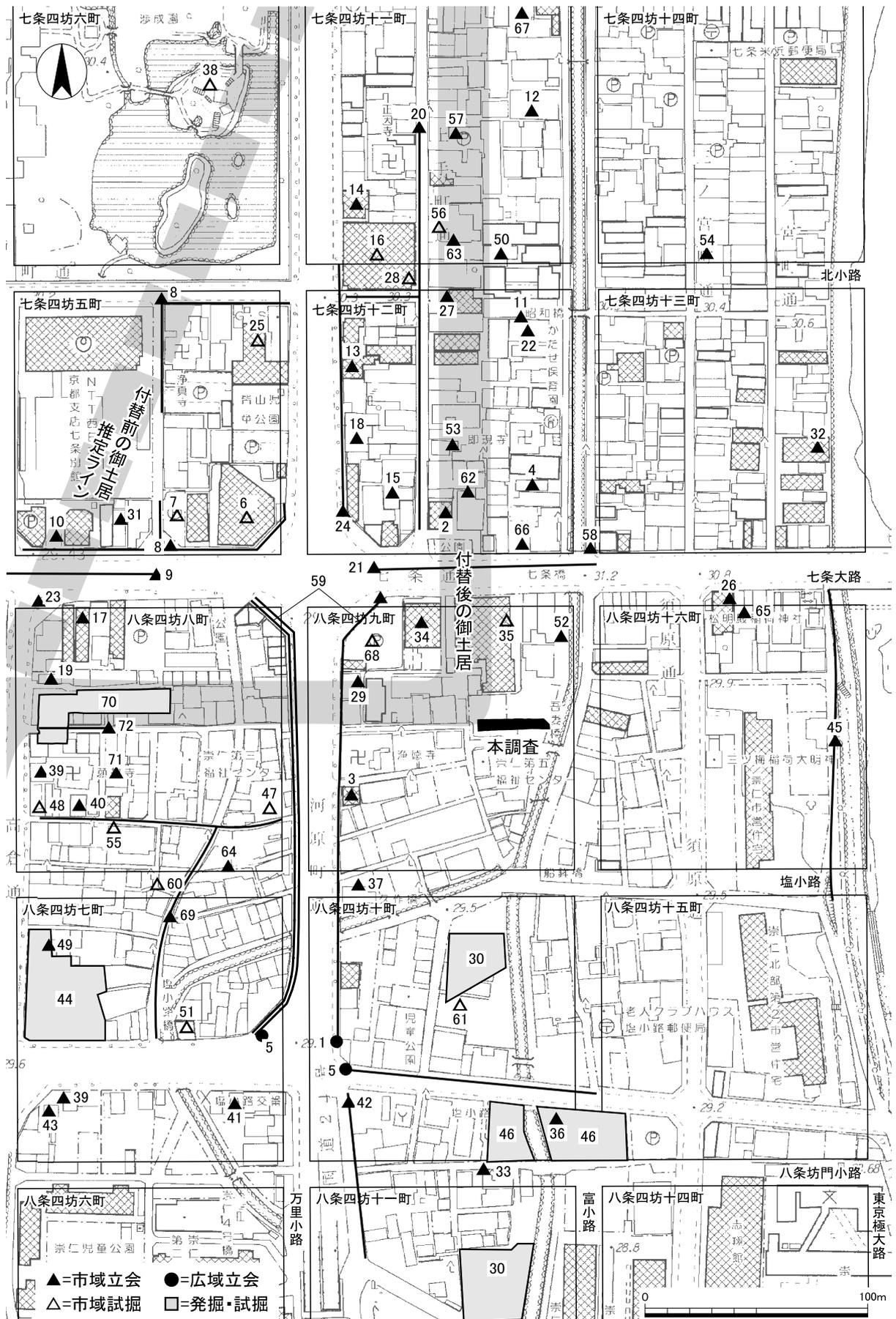


図7 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	方法	調査日	調査概要	調査記号	文献
1	八条四坊十町	広域立会	1978/10/1～1979/2/28	遺構、遺物なし	78HK-KS	1
2	七条四坊十二町	立会	1979/9/12	時期不明の遺物包含層、下層は氾濫堆積	79-285	2
3	八条四坊九町	立会	1980/6/26	-0.6mで砂礫層、-0.95mで耕作土層、以下砂礫層	80HL63	3
4	七条四坊十二町	立会	1981/2/27	-0.9mで近世～近代の流れ堆積	80HL176	3
5	八条四坊七町、十町	広域立会	1982/11/1～1983/3/31	遺構なし。近世～近代の遺物を検出	82HK-G-015-24	4
6	七条四坊五町	試掘	1984/5/25	-1.1mで江戸の遺物包含層	84HL56	5
7	七条四坊五町	試掘	1984/11/26	-0.54m以下、江戸以降の鴨川氾濫堆積	84HL227	5
8	七条大路	立会	1984/12/5	-1.18m以下、時期不明の流れ堆積	84HL236	5
9	七条大路	立会	1985/11/21	-0.95m以下、時期不明の路面	85HL248	6
10	七条四坊五町	立会	1986/7/31	-0.52m以下、時期不明の流れ堆積	86HL112	7
11	七条四坊十二町	立会	1987/8/7	-0.55m以下、時期不明の流れ堆積	87HL133	8
12	七条四坊十一町	立会	1988/3/7	-0.84m以下、時期不明の流れ堆積	87HL308	9
13	七条四坊十二町	立会	1988/11/22	-0.8m以下、鴨川の氾濫堆積	88HL149	9
14	七条四坊十一町	立会	1989/2/14	-0.55m以下、時期不明の流れ堆積	88HL191	10
15	七条四坊十二町	立会	1989/10/16	-0.77m以下、時期不明の流れ堆積	89HL112	10
16	七条四坊十一町	試掘	1990/4/16	-1.6m以下、平安～江戸の遺物を含む流路堆積	90HL14	11
17	八条四坊八町	立会	1990/6/25	-1.25m以下、流れ堆積	90HL51	11
18	七条四坊十二町	立会	1991/8/19・20	-1.19m以下、室町後期の遺物包含層	91HL169	12
19	八条四坊八町	立会	1991/12/10	盛土のみ	91HL298	12
20	七条四坊十一町	立会	1992/4/13	-0.17m以下、時期不明の路面、遺物包含層	92HL3	13
21	七条大路	立会	1992/5/2～9/28	-1.48m以下、時期不明の遺物包含層、流れ堆積	92HL51	13
22	七条四坊十二町	立会	1992/8/31	-0.43m以下、鴨川の氾濫堆積	92HL187	13
23	七条大路	立会	1992/12/11～1993/2/5	-0.4m以下、七条大路路面、鎌倉～江戸の遺物包含層	92HL308	14
24	七条四坊十一町、十二町	立会	1994/8/24～	-0.92m以下、江戸の遺物包含層	94HL216	15
25	七条四坊五町	試掘	1996/2/2	-0.7mで鴨川の氾濫堆積	(5)	17
26	八条四坊十六町	立会	1995/12/18	地表下1.48mで江戸の遺物包含層。1.75m以下、流れ堆積	95HL374	16
27	七条四坊十二町	立会	1996/8/19・22	-0.43m以下、流れ堆積	96HL198	18
28	北小路	試掘	1997/6/10	鴨川の氾濫により遺構、遺物発見できず	(41)	19
29	八条四坊九町	立会	1997/4/23	-0.45m以下、砂礫の流れ堆積	97HL45	20
30	八条四坊十町、十一町	試掘	1998/3/11～16	-1.0m以下、砂礫層	97HK-BP	21
31	七条四坊五町	立会	1998/8/5	-1.0m以下、氾濫堆積	98HL171	22
32	七条四坊十三町	立会	2000/9/22～29	-0.88mで近世の遺物包含層	00HL186	23
33	八条坊門小路	立会	2000/5/1・8	-0.8m以下、氾濫堆積	00HL28	23
34	八条四坊九町	立会	2000/7/31～	-1.35m以下、灰黄褐色砂礫の流れ堆積	00HL134	23
35	八条四坊九町	試掘	2001/11/5	-0.25～0.87mで砂礫層、上面で中近世の土坑を検出	(40)01H264	24
36	八条四坊十町	立会	2001/6/15～27	-0.9m以下、流れ堆積	01HL83	25
37	塩小路	立会	2001/1/7	-0.5mで近世の遺物包含層	01HL310	26
38	七条四坊六町	試掘	2002/7/24	涉成園成立以前は河川の氾濫堆積。一部で時期不明の遺物包含層を認める	(32)14N3	27
39	八条四坊七町	立会	2002/4/6	-0.7mで江戸末期の遺物包含層	02HL22	26
40	八条四坊八町	立会	2002/7/4～9	-1.15mで江戸末期の遺物包含層	02HL107	26
41	八条四坊七町	立会	2002/7/26～	-0.42mで時期不明の流れ堆積	02HL136	26
42	八条四坊十町、十一町	立会	2002/9/19～10/18	-1.25mで時期不明の流れ堆積	02HL199	26
43	八条四坊七町	立会	2003/7/14・15	-0.25mで氾濫堆積	03HL124	28

No.	遺跡名	方法	調査日	調査概要	調査記号	文献
44	八条四坊七町	発掘	2003/9/16～12/26	各砂礫層上面で平安後期～江戸の遺構・遺物を検出。江戸時代の旧高瀬川を検出	03HK-BQ4	29
45	八条四坊十六町	立会	2004/3/19～31、4/5・7	-0.65mで江戸以降の路面、-0.8mで江戸以降の遺物包含層	03HL403	30
46	八条四坊十町	(試掘)	2005/3/1～26	-1.0m前後で近世～近代の耕作土、以下は砂礫層	04HK-BQ5	31
47	八条四坊八町	試掘	2005/10/14	-0.6m以下、幕末頃の焼土層か	(41)05H278	32
48	八条四坊八町	試掘	2005/12/28	-1.15m以下、砂礫の河川氾濫堆積	(42)05H481	32
49	八条四坊七町	立会	2005/6/6・7	-1.1mで近世の遺物包含層	05HL88	33
50	七条四坊十一町	立会	2006/3/6～8	-1.0mで黄褐色砂礫の氾濫堆積	05HL425	34
51	八条四坊七町	試掘	2006/9/6	氾濫堆積である地山で近世以後の2時期の旧高瀬川流路を検出	06H246	35
52	八条四坊九町	立会	2006/10/16・18	-0.53mで近世以降の遺物包含層。-1.4m以下、にぶい黄褐色砂礫の地山	06HL332	34
53	七条四坊十二町	立会	2007/7/24～8/3	No.1:-0.58mで江戸前期の遺物包含層。No.5:-1.05m以下、黄褐色細砂の地山	07HL182	36
54	七条四坊十四町	立会	2007/6/25・27～29	No.1:-0.4mで江戸後期の遺物包含層。-1.3m以下、褐色砂礫の地山。No.2:-0.37mで江戸後期の土坑	07HL146	36
55	八条四坊八町	試掘	2008/1/16	-1.3mまで近世遺物包含層、以下地山	(7)07H454	37
56	七条四坊十一町	試掘	2008/8/25	-0.86mで砂礫の地山	(46)08H199	42
57	七条四坊十一町	立会	2008/4/11～18	-1.0m以下、にぶい黄褐色粗砂の地山	08HL20	38
58	七条四坊十三町	立会	2008/11/20・25	-0.5mで近世以降の遺物包含層。-0.54mで近世の遺物包含層。-0.69m以下、黄褐色細砂の氾濫状堆積	08HL302	38
59	八条四坊九町他	立会	2008/4/23～7/2	-1.6m以下、暗褐色砂礫の地山	08HL35	38
60	塩小路	試掘	2009/1/23	-1.0～1.2mで砂礫の洪水堆積	(5)08H426	39
61	八条四坊十町	試掘	2009/1/16・19	-1.1mで粗砂の地山を確認	(6)08H439	39
62	七条四坊十二町	立会	2009/3/2～9	No.3:-0.5mで近世以降の遺物包含層。No.4:-1.27m以下、にぶい黄褐色砂礫の地山	08HL393	40
63	七条四坊十一町	立会	2009/7/13～21	No.2:-0.47mで時期不明の落込	09HL141	40
64	八条四坊八町	立会	2011/5/9・16	-1.4m以下、黄褐色砂礫の地山	11HL33	48
65	八条四坊十六町	立会	2011/8/8・19・22	-0.8mで近世以降の湿地状堆積	11HL149	41
66	七条四坊十二町	立会	2011/8/11～18	-1.05m以下、にぶい黄褐色砂礫の地山	11HL156	41
67	七条四坊十一町	立会	2011/8/26	-1.4mで近代以降の氾濫堆積	11HL171	41
68	八条四坊九町	試掘	2012/3/27	-1.1mで自然堆積の砂礫層	(9)11H482	42
69	八条四坊七町	立会	2013/9/24～30 10/1～8	-1.02mで近世以降の遺物包含層。-1.16mでオリブ灰色粗砂の氾濫状堆積。-1.35m以下、灰オリブ色細砂の地山	13HL301	43
70	八条四坊八町	発掘	2013/4/17～8/12	江戸時代前期に付け替えられた御土居の土塁底部を検出	13HK-BZ1	44
71	八条四坊八町	試掘	2014/7/22	-1.0mで近世整地層。-1.1mで洪水由来の砂礫が堆積	13H574	45
72	八条四坊七町、八町	立会	2014/2/19～21・24	-1.3mで灰オリブ色砂泥。遺構、遺物は検出できず	13H512	46

※ 方法内の(試掘)は京都市埋文研が実施した発掘調査に準ずる調査である。  
調査記号は京都市埋文研と文化財保護課が調査毎に付すものである。

文献 (表1 周辺調査一覧表)

- 1 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和54年度』 京都市文化観光局 1980年
- 3 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』 京都市文化観光局 1981年
- 4 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 5 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』 京都市文化観光局 1985年
- 6 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』 京都市文化観光局 1986年
- 7 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
- 8 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』 京都市文化観光局 1988年

- 9 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』 京都市文化観光局 1989年
- 10 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 11 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 京都市文化観光局 1991年
- 12 『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』 京都市文化観光局 1992年
- 13 『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』 京都市文化観光局 1993年
- 14 『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』 京都市文化観光局 1994年
- 15 『京都市内遺跡立会調査概報 平成6年度』 京都市文化観光局 1995年
- 16 『京都市内遺跡立会調査概報 平成7年度』 京都市文化市民局 1996年
- 17 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 18 『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』 京都市文化市民局 1997年
- 19 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
- 20 『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
- 21 永田宗秀「平安京左京八条四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 22 『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』 京都市文化市民局 1999
- 23 『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
- 24 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
- 25 『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』 京都市文化市民局 2002年
- 26 『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』 京都市文化市民局 2003年
- 27 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度』 京都市文化市民局 2003年
- 28 『京都市内遺跡立会調査概報 平成15年度』 京都市文化市民局 2004年
- 29 加納敬二・永田宗秀『平安京左京八条四坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003 - 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 30 『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』 京都市文化市民局 2005年
- 31 布川豊治「平安京左京八条四坊跡」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 32 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
- 33 『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』 京都市文化市民局 2006年
- 34 『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
- 35 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』 京都市文化市民局 2007年
- 36 『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』 京都市文化市民局 2008年
- 37 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』 京都市文化市民局 2009年
- 38 『京都市内遺跡立会調査報告 平成20年度』 京都市文化市民局 2009年
- 39 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成21年度』 京都市文化市民局 2010年
- 40 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成21年度』 京都市文化市民局 2010年
- 41 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成23年度』 京都市文化市民局 2012年
- 42 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成24年度』 京都市文化市民局 2013年
- 43 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』 京都市文化市民局 2014年
- 44 近藤章子『平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013 - 11 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- 45 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局 2015年
- 46 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成26年度』 京都市文化市民局 2015年

### 3. 遺 構

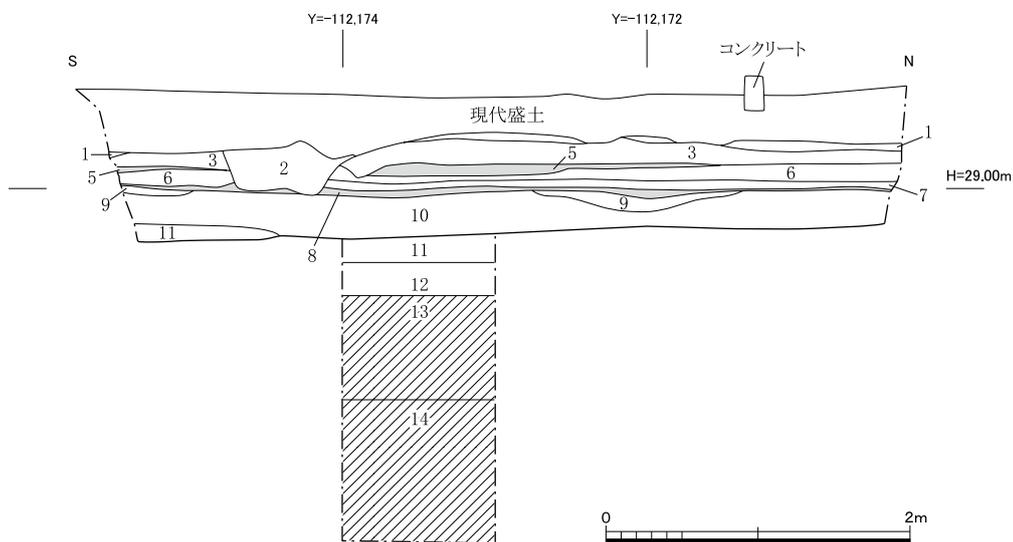
調査区は東西約32m、南北約5m、現地表の標高は29.8mある。

調査は3面実施した。主な遺構には、西半部は近世の宅地、東半部は舟入がある。第1面はタタキ1の形成面で江戸時代末期、第2面はタタキ2の形成面で江戸時代後期から末期、第3面は舟入の形成面で舟入は江戸時代後期から末期に埋没する。

#### (1) 基本層序 (図8・9)

西半部の層序は、西壁を基に述べる。地表下0.3mまで近代から現代盛土、0.45mまで近世焼土層(図8-3層)、0.52mまでが近世のタタキ形成層(図8-5層、タタキ1)、0.58mまでが近世整地層1(図8-6層)、0.65mまでが再び近世タタキ形成層(図8-8層、タタキ2)、0.9mまでが近世整地層2(図8-9・10層)、1.35mまでが土壌化層(図8-11・12層)、1.35m下は細砂・粗砂・砂礫層の基盤層となる。砂礫層は断割調査により、標高26.35m付近まで調査し、さらに下層まで堆積することを確認した。砂礫層から中世と思われる土師器の小片が出土した。

東半部の層序は、調査区南壁の東半部の中央部を基に述べる。地表下0.5mまでは現代盛土、1.5mまで焼け瓦・焼土・炭を多量に含む近世盛土(図9-1~6層)、以下、2.0mまでが池状堆積層(図9-32~35層)、2.0m以下が自然堆積層と(図9-41層)なる。



- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 1 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2cm少量                             | 7 10YR5/4にぶい黄褐色+4/4褐色粗砂 混礫φ3~10cm多量   |
| 2 10YR4/2灰黄褐色細砂 焼土・炭含(攪乱・近世以降)                           | 8 10YR4/4褐色粘質土+10YR4/6褐色粘土(タタキ2)      |
| 3 10YR4/2灰黄褐色+5YR4/4にぶい赤褐色細砂<br>炭・壁土多量含(焼土層)             | 9 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2~2cm少量        |
| 4 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 混礫φ1cm以下 炭少量含                          | 10 2.5Y4/3~4/4オリーブ褐色粗砂 混礫φ0.5~8cm中量   |
| 5 2.5Y4/2暗灰黄色細砂(タタキ1)                                    | 11 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 炭少量含 土壌化層          |
| 6 2.5Y4/3オリーブ褐色+2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂<br>混礫φ1~2cm少量 炭・焼土・漆喰片含 | 12 10YR4/3にぶい黄褐色細砂混粗砂 混礫φ1~2cm中量 土壌化層 |
|  | 13 5Y5/1灰色+5Y5/4オリーブ色細砂~粗砂            |
|  | 14 2.5Y4/1黄灰色+2.5Y4/2暗灰黄色粗砂~砂礫φ5~20cm |

図8 西壁断面図 (1:50)

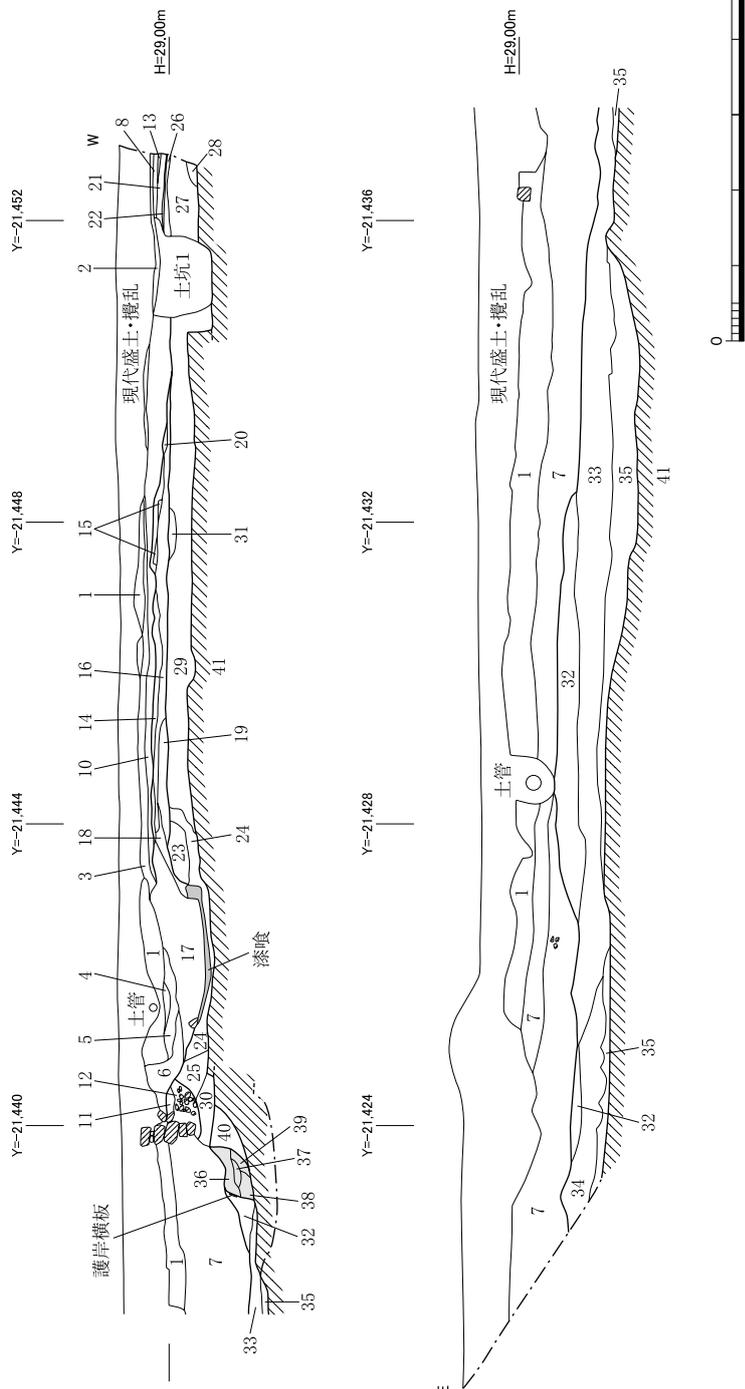


図9 南壁断面図 (1:100)

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色+褐色細砂 混礫φ1~5cm多量
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2cm少量
- 3 10YR4/2灰黄褐色細砂 炭・焼土中量含
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2~3cm中量
- 5 10YR3/2黒褐色粘質土 炭多量含
- 6 2.5Y4/3~4/4オリーブ褐色粘質土 瓦片・炭・焼土少量含
- 7 10YR4/2灰黄褐色細砂 混礫φ1~7cm 焼瓦多量含
- 8 10YR4/2灰黄褐色+5YR4/4にぶい赤褐色細砂 炭・壁土多量含(焼土層)
- 9 2.5Y5/2暗灰黄色+10YR4/2灰黄褐色粗砂 混礫φ2~7cm少量 瓦片・染付含
- 10 7.5YR4/6褐色+10YR4/2灰黄褐色粘質土 炭多量含(焼土層)
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 混礫φ3~5cm少量 瓦片含
- 12 2.5Y5/2~4/2暗灰黄色細砂 混礫φ0.5~8cm中量 炭少量含
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色細砂(タタキ1)
- 14 10YR4/3~5/3にぶい黄褐色粘質土
- 15 10YR5/2灰黄褐色粗砂 炭・焼土少量含
- 16 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土
- 17 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 瓦片・炭少量含(園池23埋土)
- 18 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 炭・焼土中量含
- 19 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 漆喰少量含
- 20 10YR4/2灰黄褐色細砂
- 21 2.5Y4/3オリーブ褐色+2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂 混礫φ1~2cm少量 炭・焼土・漆喰片含
- 22 10YR4/4褐色粘質土+10YR4/6褐色粘土(タタキ2)
- 23 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂
- 24 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色粘質土 炭中量 混礫φ0.2~8cm中量
- 25 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 混礫φ1~10cm多量
- 26 2.5Y4/2オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2~2cm少量
- 27 2.5Y4/3~4/4オリーブ褐色粗砂 混礫φ0.5~8cm中量
- 28 10YR4/3にぶい黄褐色細砂 炭少量含
- 29 10YR4/3~5/3にぶい黄褐色粗砂 炭少量含
- 30 2.5Y4/1黄褐色粗砂 混礫φ1~10cm多量
- 31 10YR4/2灰黄褐色微砂(土坑)
- 32 10YR3/1黒褐色細砂~極細砂 染付含
- 33 10YR4/1褐色細砂~極細砂
- 34 10YR4/1褐色+2.5Y5/3黄褐色粗砂 混礫φ1~3cm少量 炭・陶器片含
- 35 10YR4/1褐色~3/1黒褐色極細砂~シルト
- 36 2.5Y3/2黒褐色粘質土 炭中量含
- 37 2.5Y4/3~4/4オリーブ褐色細砂
- 38 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色粘質土
- 39 10YR4/2灰黄褐色粗砂 混礫φ0.5~4cm少量
- 40 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 混礫φ0.5~10cm多量
- 41 2.5Y5/2暗灰黄色+2.5Y4/6オリーブ褐色砂礫(江戸時代基礎層)

## (2) 第1面 (図10、図版1-1)

第1面は焼土層下の江戸時代末期から明治期の遺構面で、調査区西半の大部分で被熱痕跡を確認した。主な遺構には礎石建物(建物1)、タタキ(タタキ1)、地鎮遺構(地鎮25)、土坑(土坑1・2)、石垣(石垣20)などがある。建物1にはタタキ1を伴う。また、建物1に伴う整地層下から獣骨・銭貨、銅製鋏が出土し、建物1建設時の地鎮遺構の可能性があり地鎮25とした。

**建物1** (図11) 南北1間以上、東西3間以上の礎石建物である。調査区西端で礎石建物に伴うタタキ1を検出した。礎石は石1～5の5石を検出したが、建物規模は不明確である。礎石は、長さ0.3～0.4m、幅約0.2mある。礎石3・4の周辺にはにぶい黄褐色粘質土層が施される。礎石周縁はこの粘土層に覆われており、建築造作時の整地層であることがわかる。タタキ1は、漆喰を用い、厚さ2～8cm、幅約1m、長さ約5mあり調査区外へ広がる。

**地鎮25** (図12、図版2-1) 建物1に伴うにぶい黄褐色粘質土層中から獣骨、銭貨27枚、銅製の鋏4点、泥面子3点がまとまって出土した。獣骨は一箇所、周辺に銭貨や鋏などが分布する。銭貨は北宋銭1枚のほかは寛永通寶がある。泥面子は大黒天、俵、袋を模ったものである。これらは礎石建物1建設に伴う地鎮を示すと考えられる。

**土坑1** 調査区西部で検出した平面形が方形の土坑である。検出規模は東西2.1m、南北3.2m以上、深さ0.78mある。江戸時代末期の土器類、多量の焼瓦、炭・焼土が出土した。火災後の廃棄土坑である。

**土坑13** (図13、図版2-2) 調査区西半の中央北端で検出した平面形が楕円形の石組土坑である。石組の規模は、内法で長径1.1m、短径0.4mある。長径0.3～0.45mの花崗岩と長径0.1～0.3mの河原石を積み上げる。石組北東部は残存状態が良好で6段分を検出したが、大半は上部が削平を受け1～2段残存する。埋土上半から焼瓦・炭・焼土とともにガラス片が出土したが、掘形及び底面からは、江戸時代末期の土器類が出土した。

**石垣20** (図14、図版3-1) 調査区中央で検出した南北方向の石垣である。長さ4.7m検出し、さらに調査区外へと続く。高さ約0.5mある。石垣は東面する。中央部は2～3段の石を積む。基底石には長軸40～60cmの石を使用し、基底石上に長軸10～30cmの石を積む。石垣上面は、水平であることから、仕上げ面である。石垣背面は、裏込に径3～7cm大の石を多量に詰め、石垣上面まで比較的精良な黄褐色砂で埋める。

なお、石垣直下及び石垣基底面外で杭跡を8箇所検出した。直下の杭跡間隔は約0.7mある。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代後期 ～明治初頭	建物跡、土坑、園池、石垣、舟入、井戸	

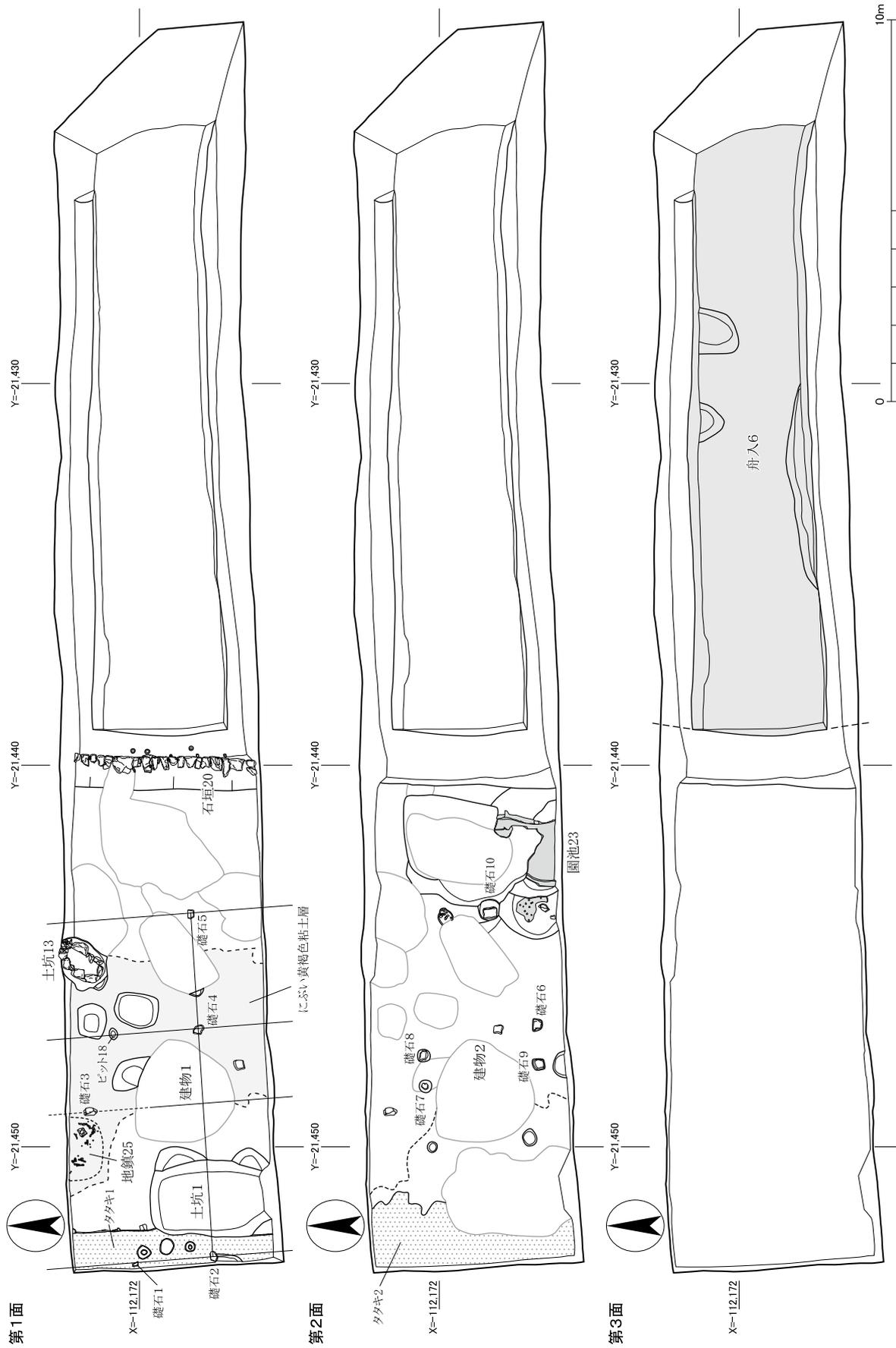


図10 遺構平面図 (1 : 150)

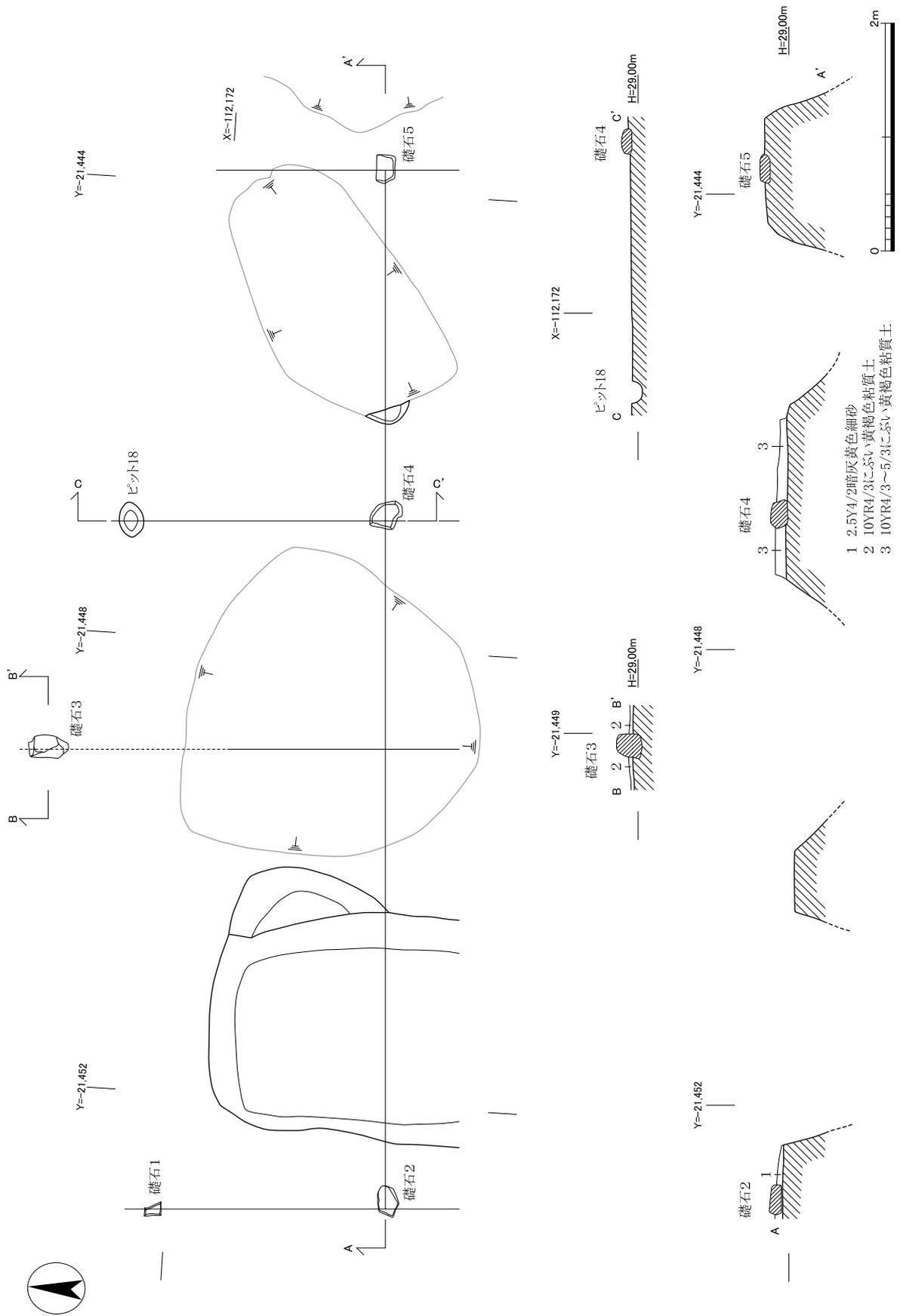


図11 建物1実測図 (1 : 50)



Y=-21,451

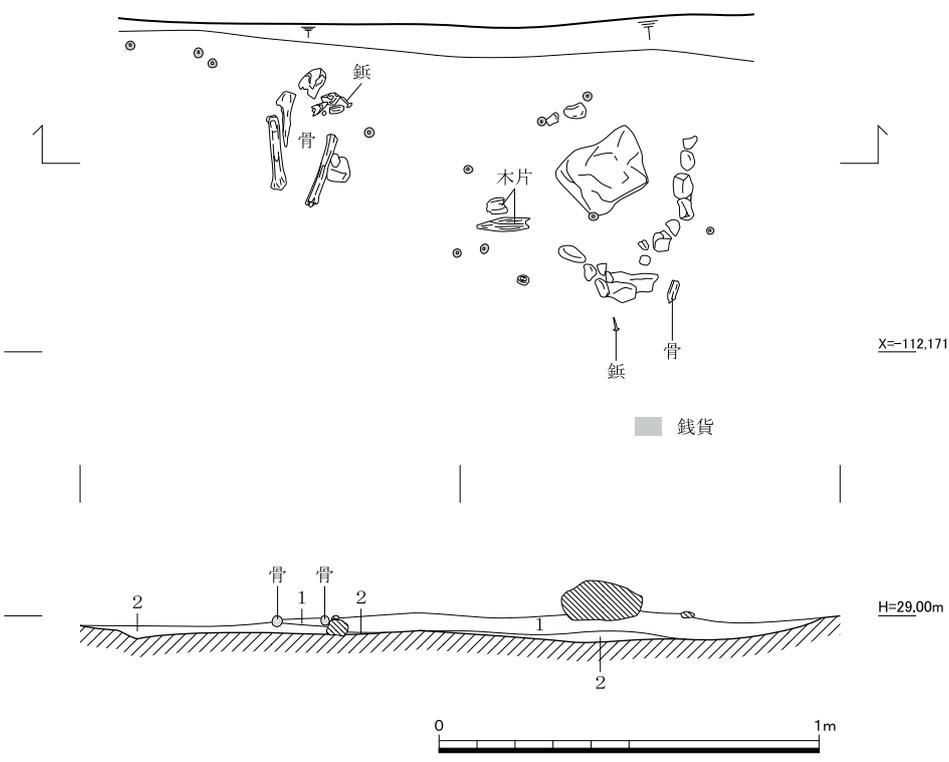
Y=-21,450

Y=-21,449

X=-112,170

X=-112,171

H=29,00m



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 混礫φ0.2~2cm少量

図12 地鎮25実測図 (1 : 20)

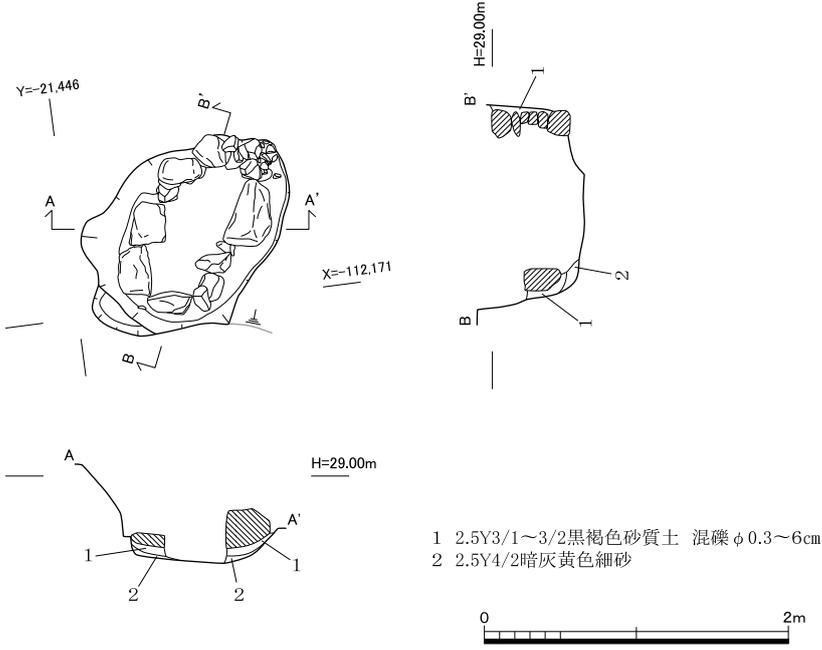


Y=-21,446

X=-112,171

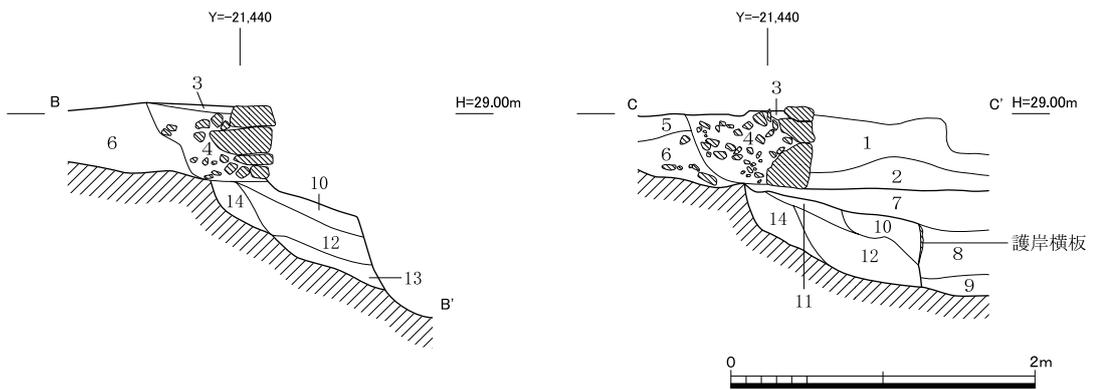
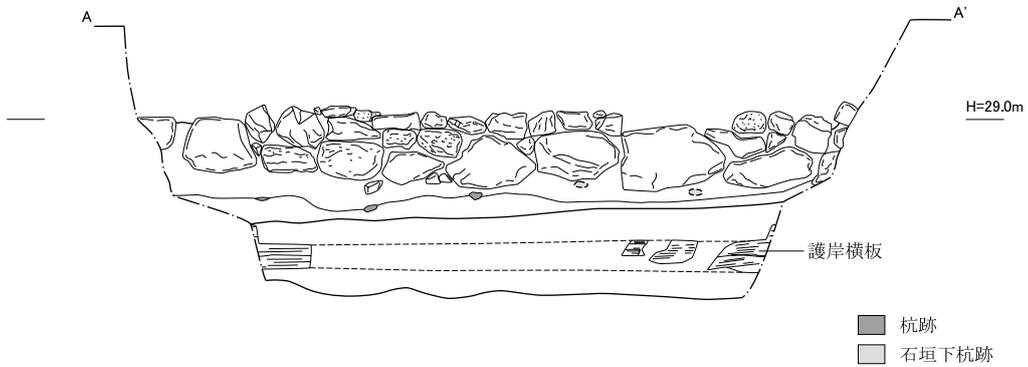
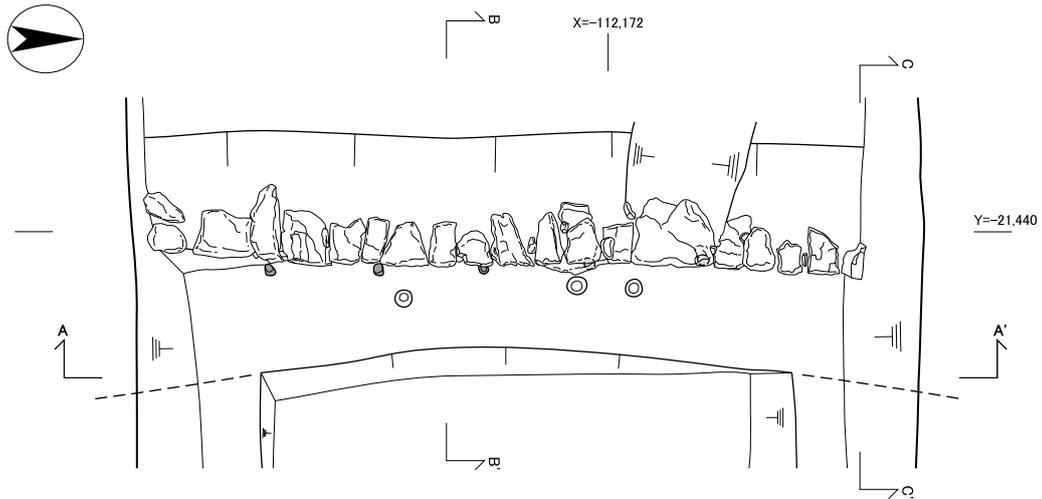
H=29,00m

H=29,00m



- 1 2.5Y3/1~3/2黒褐色砂質土 混礫φ0.3~6cm
- 2 2.5Y4/2暗灰黄色細砂

図13 土坑13実測図 (1 : 50)



- 1 10YR4/2灰黄褐色細砂 混礫φ1~7cm 焼瓦多量・漆喰・染付・陶器多量、炭含
- 2 10YR4/1褐灰色+10YR3/1黒褐色細砂~極細砂 瓦・陶器多量
- 3 10YR4/2灰黄褐色細砂
- 4 10YR4/2灰黄褐色細砂 混礫φ3~7cm多量
- 5 10YR4/2灰黄褐色+10YR4/3にぶい黄褐色粗砂~細砂
- 6 10YR4/1褐灰色+10YR4/3にぶい黄褐色細砂 混礫φ3~5cm中量
- 7 10YR4/1褐灰色+10YR3/1黒褐色細砂~シルト 混礫φ3~10cm多量 炭少量含
- 8 10YR3/1黒褐色細砂~極細砂(粗砂混じり)混礫φ1~8cm少量 染付含
- 9 10YR4/1褐灰色+10YR3/1黒褐色極細砂~シルト 混礫φ1~3cm少量 木片多量含
- 10 10YR4/2灰黄褐色粘質土 混礫φ1~5cm少量 微砂含
- 11 10YR5/1褐灰色+10YR4/1褐灰色細砂~シルト 炭少量含
- 12 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 混礫φ5~10cm 微砂・漆喰含
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土+10YR4/3にぶい黄褐色砂礫 混礫φ10cm以下
- 14 10YR4/1褐灰色細砂 混礫φ1~3cm少量 粘質土含

図14 石垣20及び舟入6西護岸実測図 (1:50)

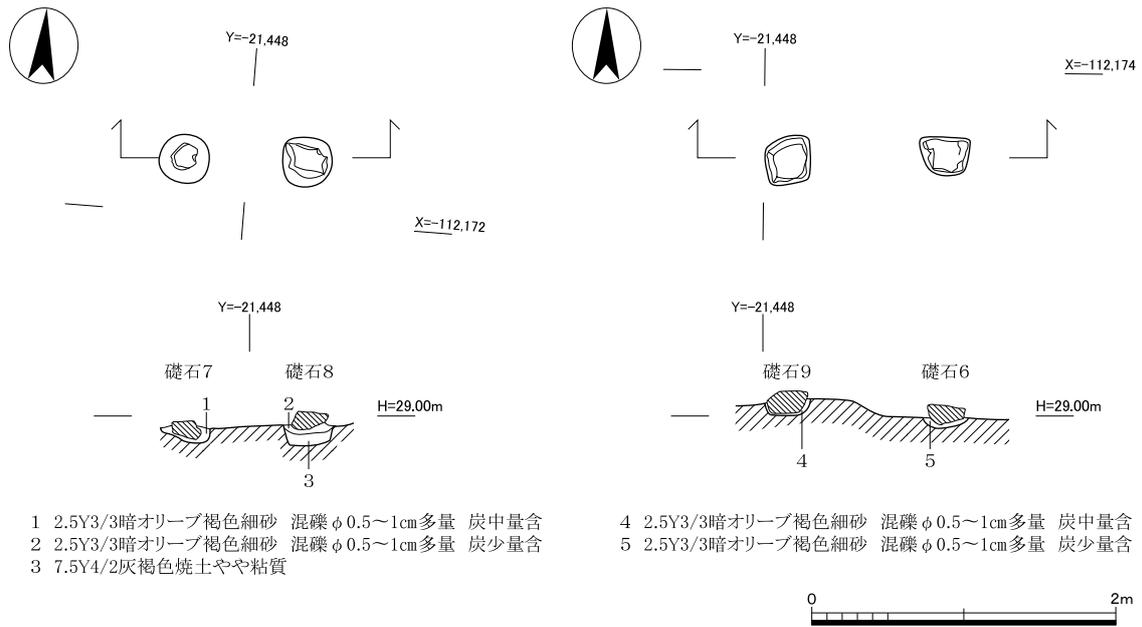


図15 建物2礎石6~9実測図(1:50)

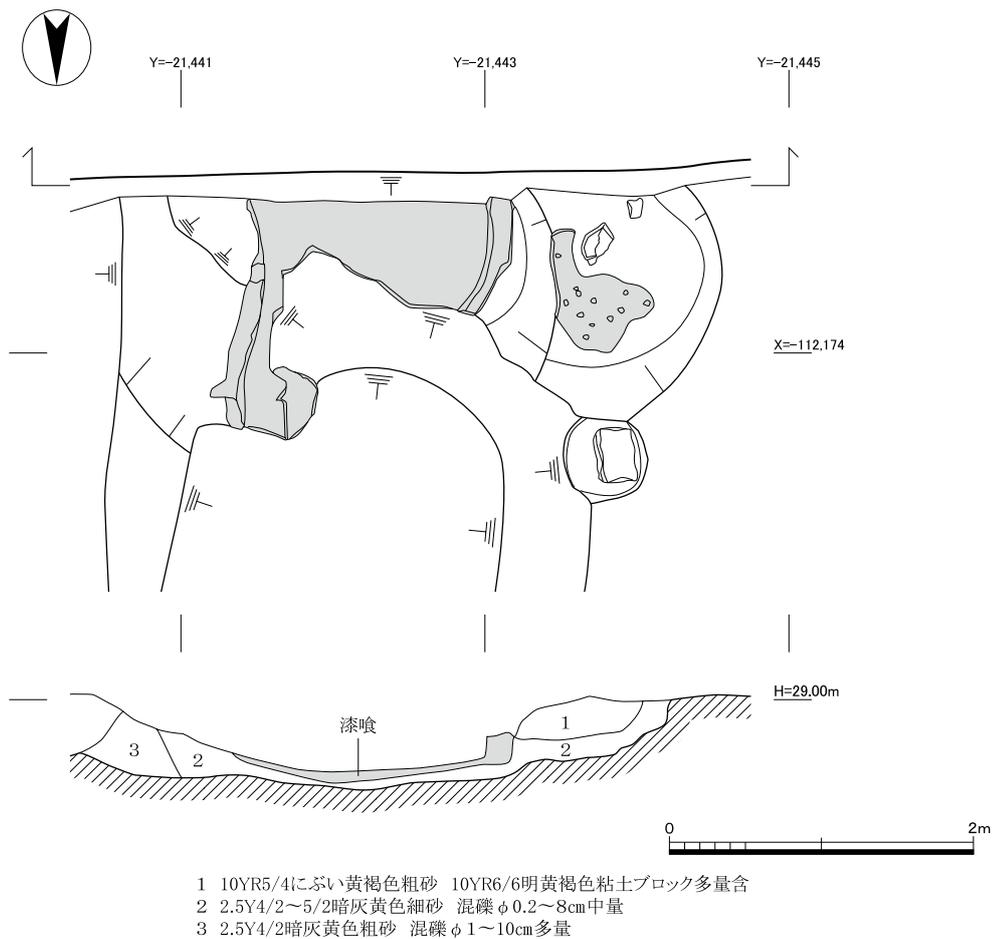


図16 園池23実測図(1:50)

### (3) 第2面 (図10、図版1-2)

第2面は、江戸時代後期から末期の遺構面で、主な遺構には礎石建物(建物2)、園池(園池23)がある。

**建物2**(図15) 調査区西半で礎石群とタタキ2を検出した。礎石は石6~10の5石を検出したが、柱筋や建物規模は不明確である。礎石は、長軸0.3~0.4m、幅約0.2mある。調査区西端にタタキ2を伴う。タタキは漆喰を用い、厚さ2~6cm、東西幅約1.1~2.0m、長さ約5mあり調査区外へ広がる。第1面のタタキ1とほぼ同じ位置にあり、建物1は、建物2の平面構造を踏襲している可能性がある。

**園池23**(図16、図版2-3) 調査区中央南寄りで検出した不定形の園池で、側縁・底面とも漆喰で塗り固める。北側は後世の遺構や攪乱により削平を受け、南側は調査区外へ広がる。検出面での規模は、掘形を含めると東西約3.4m、南北約1.6m、深さは西側が浅く、東側との高低差は約0.4mある。漆喰厚は、側縁で約20cm、底面で約10cmある。江戸時代末期の陶磁器類が多数出土した。建物2に伴う園池と考えられる。

### (4) 第3面 (図10)

第3面では、舟入6がある。開削時期は不明であるが、江戸時代後期から末期に埋没する。

**舟入6**(図14、図版3-2) 調査区東半で舟入を検出した。西端には、板を用いた護岸痕跡が遺存する。確認したのは南北4m以上、東西16m以上、深さ0.6mで、北・南・東へは調査区外へ広がる。埋土は主に黒褐色細砂~極細砂層、底面にシルト層が堆積する。底面南端は南側へさらに落ち込む。褐灰色~黒褐色シルト層が堆積し、埋土からシカ骨が数本出土した。護岸掘形には3~4層の細砂層と粘質土層を積み上げる。江戸時代後期以降の遺物が多数出土した。

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

遺物は、整理箱で35箱出土した。遺物内容には土器・陶磁器類、土製品、石製品、金属製品のほか、瓦類、木製品、鑄造関係遺物、獣骨などがあり、大半は土器・陶磁器類が占める。時期は江戸時代末期から明治時代のものである。土器・陶磁器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付、磁器、輸入陶磁器などがある。土製品には伏見人形、泥面子など、石製品には五輪塔・硯・砥石など、金属製品には銭貨・釘・鋌・煙管などがある。細片のものは図示していない。

なお、地鎮25には泥面子、銭貨・鋌、獣骨などがあり、各項で概説する。

### (2) 土器類 (表4)

舟入6出土土器 (図17) 1～7・9～12は肥前系の染付である。1～3は広東椀と呼ばれる高い高台が付く器形である。見込にはすべて文様が描かれる。4はやや浅めの椀、見込は蛇ノ目釉剥ぎが施される。5は蛇ノ目釉剥ぎ高台の皿、見込と高台内に手書きによる文様が描かれる。6・7は筒型椀、6は石畳地文、7は矢羽文が体部外面全体に描かれる。7は蛇ノ目凹型高台、焼継ぎされる。8は白磁の小椀、やや青みがかった釉薬が掛かり、丁寧に仕上げている。化粧道具の可能性はある。9・10は蓋、10は口縁端部の2箇所に煤が付着しており、灯明皿に転用した可能性がある。11は蛸唐草文の仏飯器、高台内の刳り込みは浅い。12は瓶、肩部は蛸唐草文、胴部は草花文が描かれる。13～21は京・信楽系の施釉陶器である。13は小杉椀と呼ばれる若松を錆絵により描く小型の椀である。松は簡略化されている。14は京焼の青磁菊花型水滴、注口の周囲に辰砂を施す。型作りで、胴部中央に合わせ目が残る。焼成は硬質である。15～17は灯火具である。16の灯明皿受けの口縁端部には煤が付着する。18は土瓶蓋、捻り紐状のつまみが貼りつけられる。19・20は鉄釉の鍋、20は片口である。21は白釉の鉢であるが、底部外面に煤が付着するため、煮沸具に転用されたものである。また、高台中心部に径5mmの孔が穿かれており、最終的には植木鉢として使用されたと思われる。22は堺・明石系の焼締陶器挿鉢である。挿目は8条1単位である。23は瓦器の方

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代 ～室町時代	須恵器、瓦器、輸入陶磁器				
江戸時代	土師器、染付、施釉陶器、磁器、焼締陶器、伏見人形、泥面子、瓦、石製品、金属製品、骨		染付14点、施釉陶器15点、磁器1点、焼締陶器4点、瓦器2点 須恵器1点、土製品15点、石製品1点、銭貨19点、鋌4点		
合計		38箱	76点 (2箱)	1箱	35箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

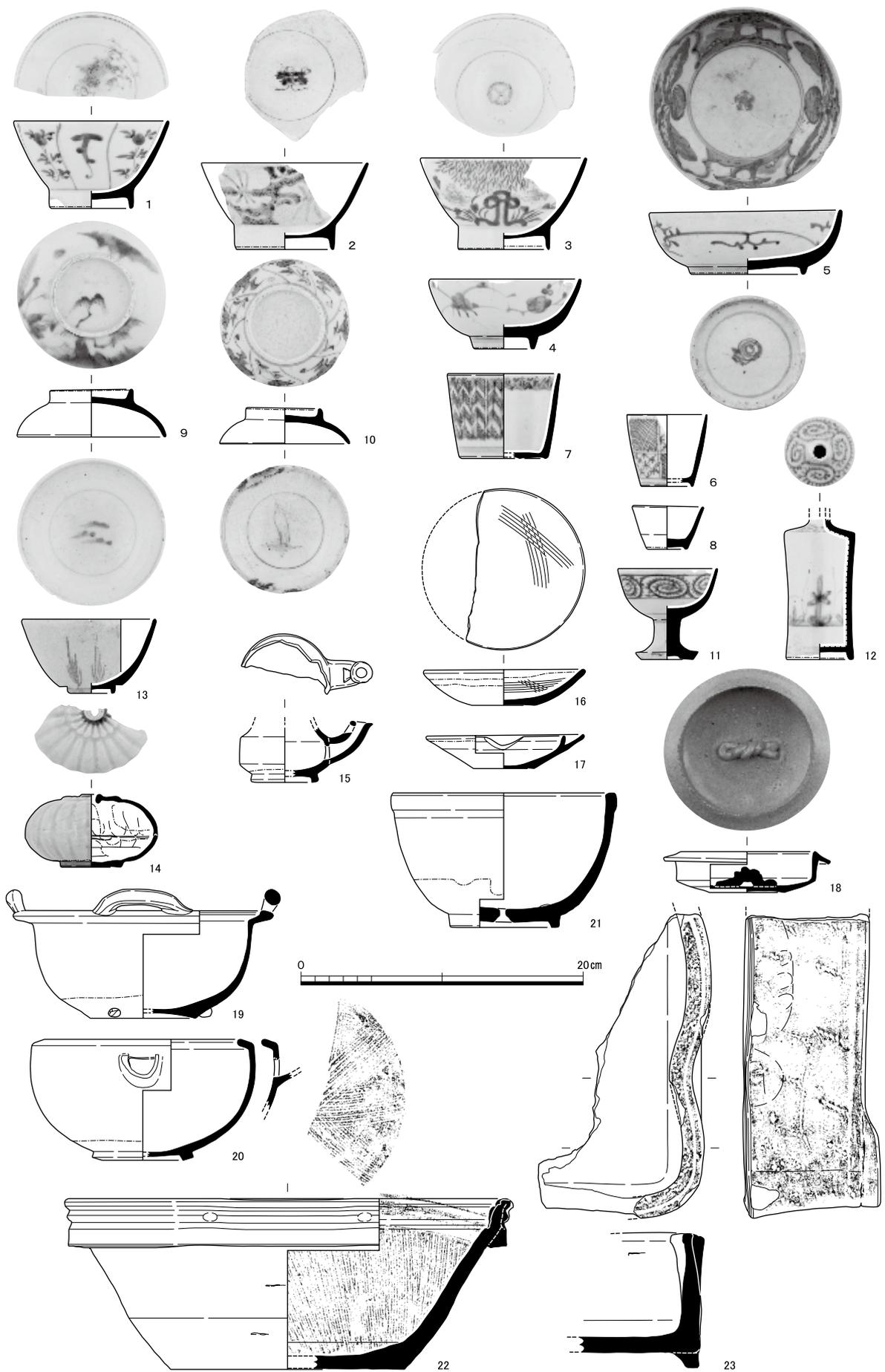


图17 舟入6出土土器实测图（1：4）

形火鉢、底部隅に脚部を貼り付ける。体部外面、口縁端部に列点文が施される。1・5・16は18世紀末、それ以外は19世紀代の土器である。

園池23出土土器(図18) 24・25は肥前系の染付である。24は皿、見込に蛇ノ目釉剥ぎがみられる。25は蛸唐草文の花瓶、26～31は京・信楽系の施釉陶器、26・27は灯明皿、28は蓋物の蓋、29～31は鍋、31は鉄釉、32～34は焼締陶器、32は匣鉢型の鉢で備前産である。体部外面に刻印がある。33は胎土が硬質な須恵質で、体部外面にヘラ描きによる文様と取手状の装飾が貼りつけられる。中位の鏝から下は露胎する。蓋受け部があるが器形は不明である。34は鉢、口縁端部は刻み目、体部外面はヘラ描きと刻印により文様を描く。35は瓦器火鉢の脚部である。外面に朱漆が塗布される。すべて19世紀代の土器である。

その他の遺構出土土器(図18) 36は肥前系の染付、合子の蓋である。攪乱から出土した。37は焼締陶器の播鉢、備前産である。播り目は11本1単位である。扇型内に「上」字の刻印が底部外面に押される。第2面包含層から出土した。

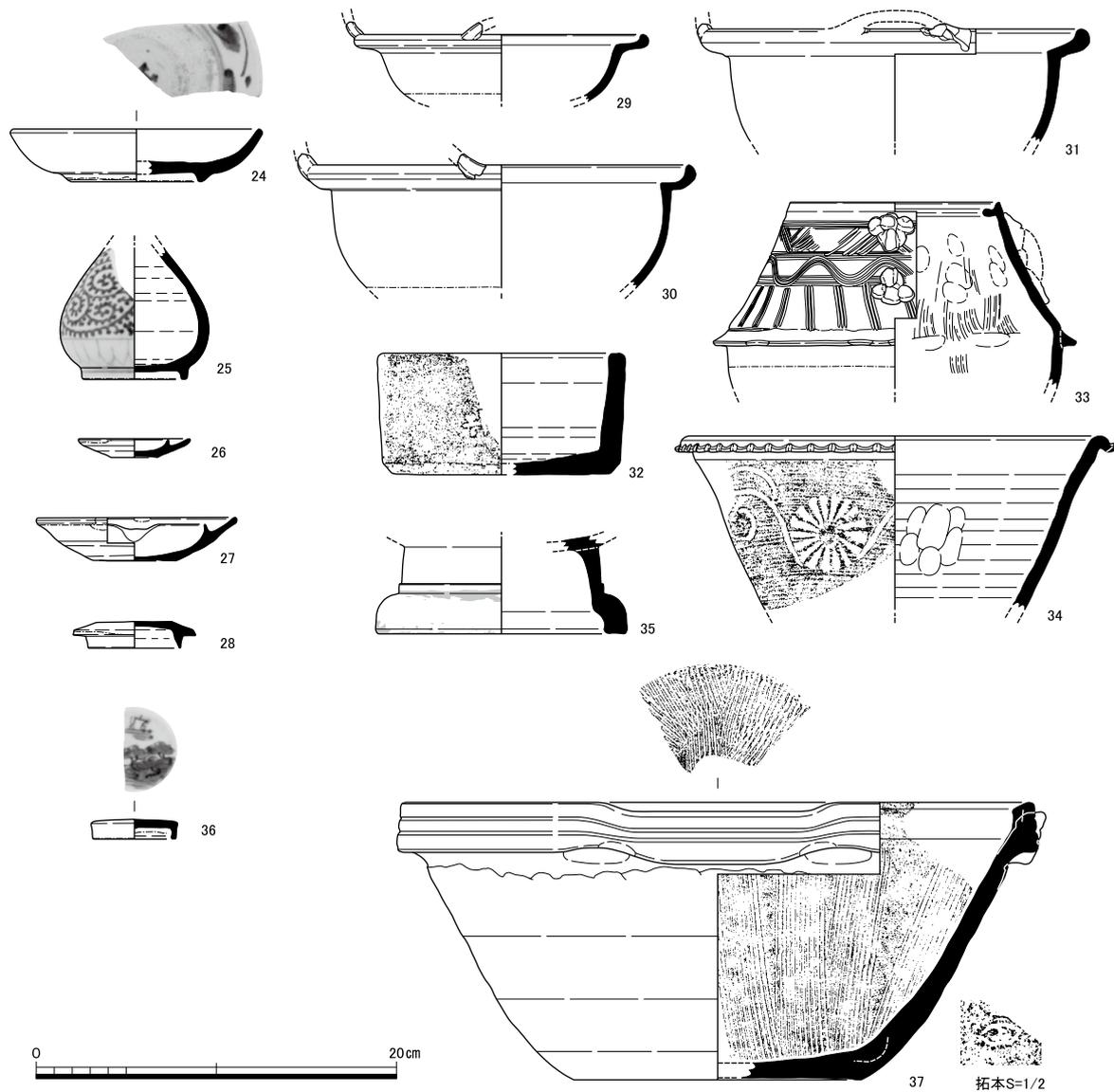


図18 園池23・その他の遺構出土土器実測図(1:4)

(3) その他の遺物 (表5)

土製品 (図19・20) 土製品には伏見人形、ミニチュア製品、泥面子などがあり、施釉も含むが、この項で概説する。<sup>4)</sup>

土1～3は小型の泥面子、土1は大黒天、土2は俵、土3は袋である。3点は地鎮25でまとまって出土し、一括品であろう。

土4はミニチュアの急須、緑釉が施される。土5は鯉型の土鈴、鱗や尾ひれなど細かく表現される。土6は狛犬型。頭部を欠損、型作りで、中実である。土7は鳩笛。土8～15は泥面子。土8～13は家紋で、土8は重ね扇文、土9は二引両文、土10は木目槌文、土11・12は三つ銀杏文、土13は鶴文。土14は「め」字、土15は不明である。土4～6、8～10は舟入6から、土7・11～15は園池23から出土した。

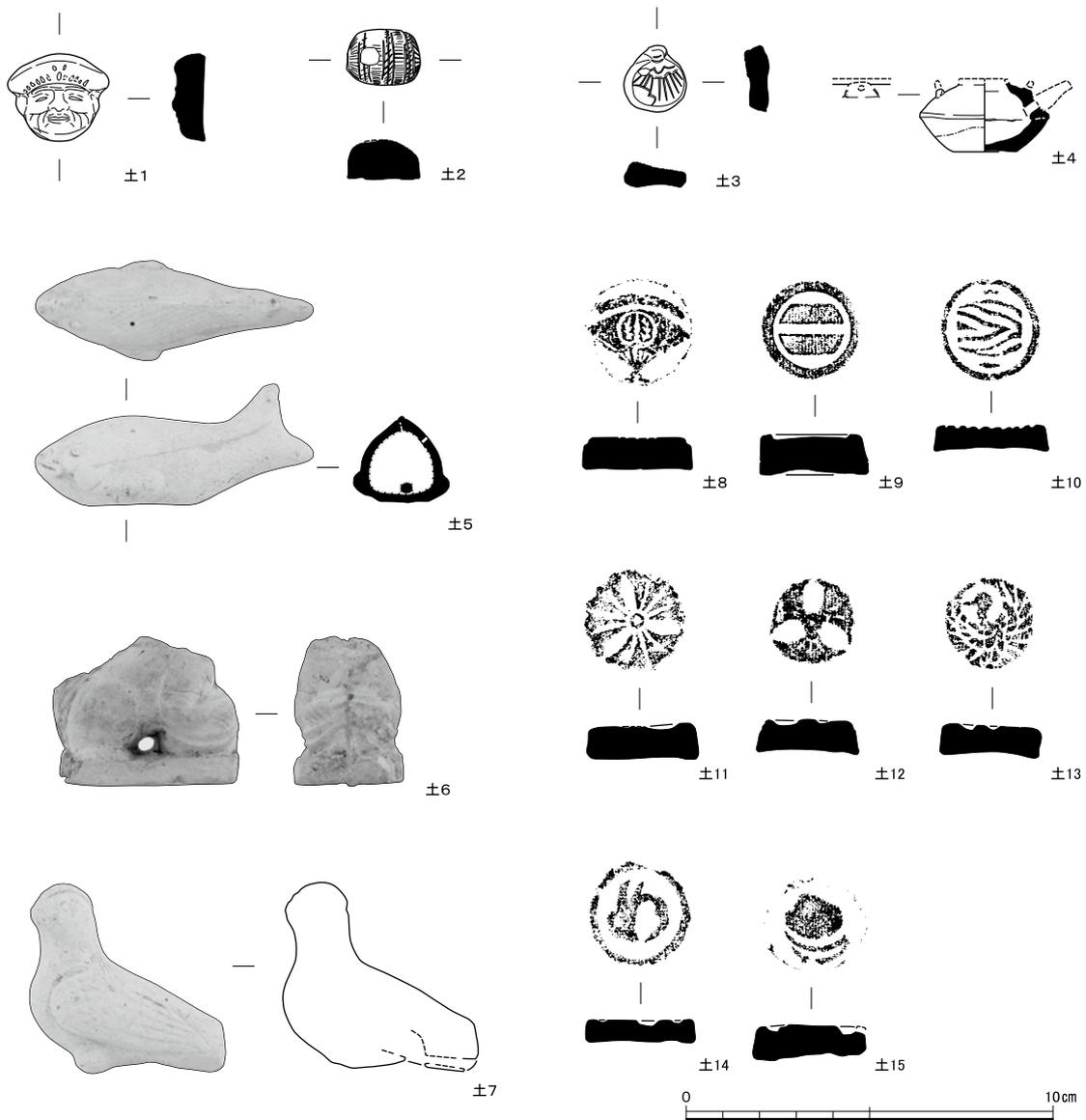


図19 土製品拓影・実測図 (1:2)

石製品(図20・21) 石1は砥石、両面に使用痕がある。色調は黄褐色を呈し、きめが非常に細かく、硬質である。角部は面取りを施し、側面全面に漆が塗布される。顕微鏡による観察では漆の下地に格子状の繊維が見られる。石材は鳴滝石と呼ばれるもので、仕上げ砥石では最上のものとして知られる。整地層から出土した。

銭貨(図22) 銭貨は27枚出土した。破損、腐食が著しいものを除き地鎮25から出土した19枚を掲載した。金1は「天聖元寶」(初鑄1023年、北宋)、他は「寛永通寶」である。金2・3は古寛永と呼ばれる寛永13年～万治2年(1636～1659)に鑄造されたもの、金4～6は文銭と呼ばれる背面上部に「文」字があるもので、寛文8年～天和3年(1668～1683)に鑄造された。金7～10は径2.4cm、金11～15は径2.3cm、金16～19は径2.2cmである。

金属製品(図22) 金20～23は銅製の鉞、4本出土した。頭部には鍍金痕が残る。地鎮25から出土した。

獣骨 獣骨は地鎮25、舟入6から出土した。分析の結果、いずれもシカ骨と判明した。

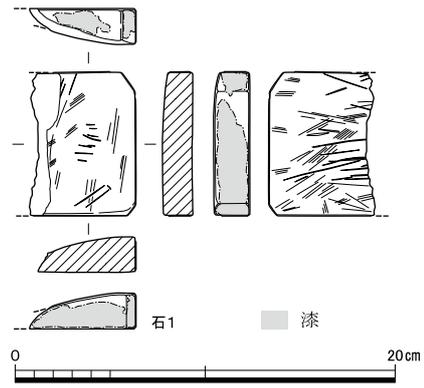


図20 砥石実測図(1:4)



図21 砥石

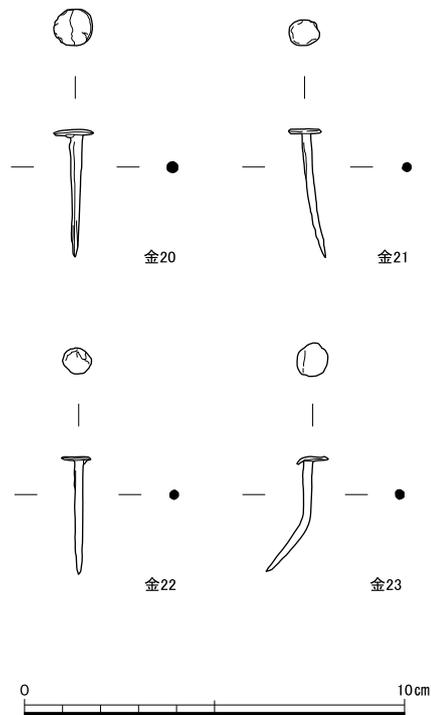
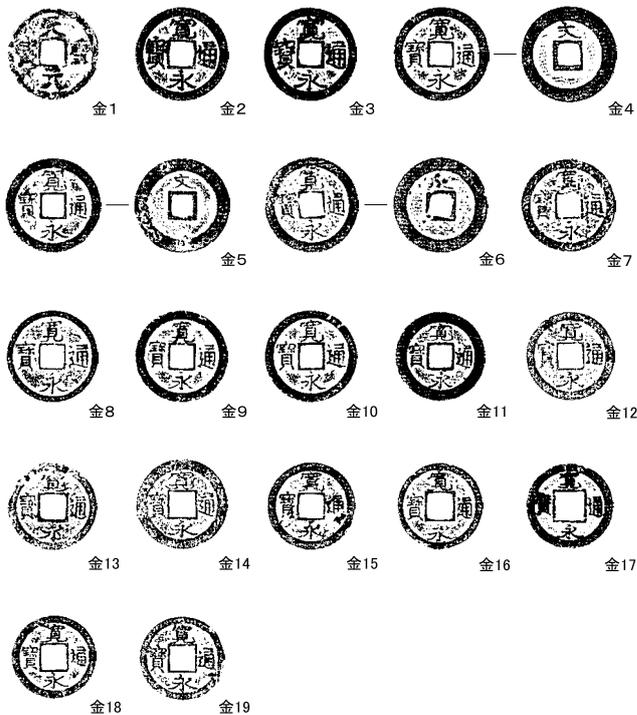


図22 銭貨拓影、金属製品実測図(1:2)

## 5. まとめ

今回の調査では、調査区の東半で高瀬川の舟入を、西半で江戸時代後期から末期の建物などを検出した。江戸時代後期以前の明瞭な遺構は検出していないため、江戸時代後期から宅地としての利用が始まったと考えられる。

また、調査区の西端で御土居の一部を検出できる想定をしたが、調査では未検出であった。『六条・七条新地絵図』<sup>6)</sup>、『大仏柳原庄田畑目之図』<sup>7)</sup> などから御土居は調査地点の北側に位置する可能性が高い。

高瀬川の舟入は『六条・七条新地絵図』の相当位置に当該施設が描かれている。絵図によれば、今回の調査地点である高瀬川の七条通南西側に、高瀬川からつづく入江表現があり、「舟入」と記されている。本調査で検出した池状遺構（舟入6）は、この絵図に示された「舟入」の一部と考えられる。天保2年（1831）、慶応4年（1868）、明治2年の絵図には、高瀬川から御土居に向かって東西方向の水路状記載がある。明治4年の絵図（図24）には「船入」が、明治6年の地籍図『山城国愛宕郡第六區柳原庄円之六条村』にも「入江」が描かれている。調査で検出した舟入6とは若干位置がずれ小規模であるが、明治時代初頭までは「入江」状の施設が存在したことがわかる。また、明治6年（1873）7月「柳原庄元船御番汀地組込につき願書」に添付された絵図には「船廻し」<sup>8)</sup>が描かれる。

一方、現在の高瀬川は敷設当初のものではなく、17世紀中頃に御土居とともに付け替えられたものと考えられている。元和6年（1620）あるいは寛永元年（1624）の作画とされる『京都図屏風』<sup>9)</sup>や『寛永十四年洛中絵図』<sup>10)</sup>などの江戸時代初頭の絵図によると、現在の六条河原町通

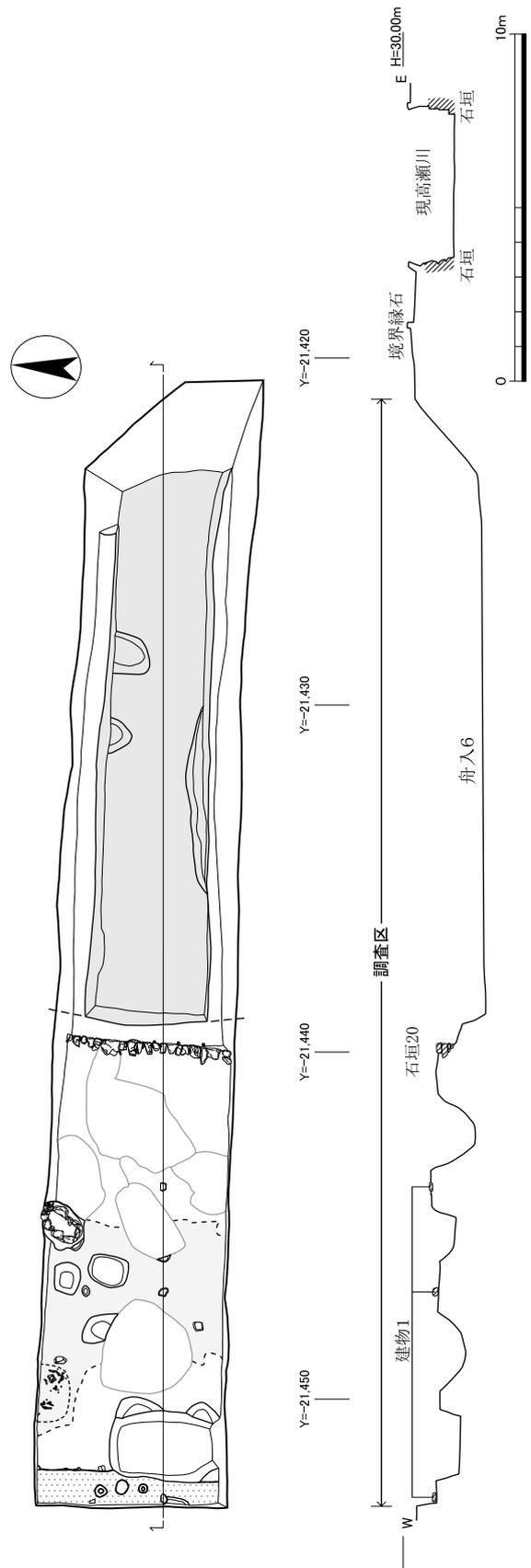


図23 調査区及び現高瀬川東西方向断面図（1：200）

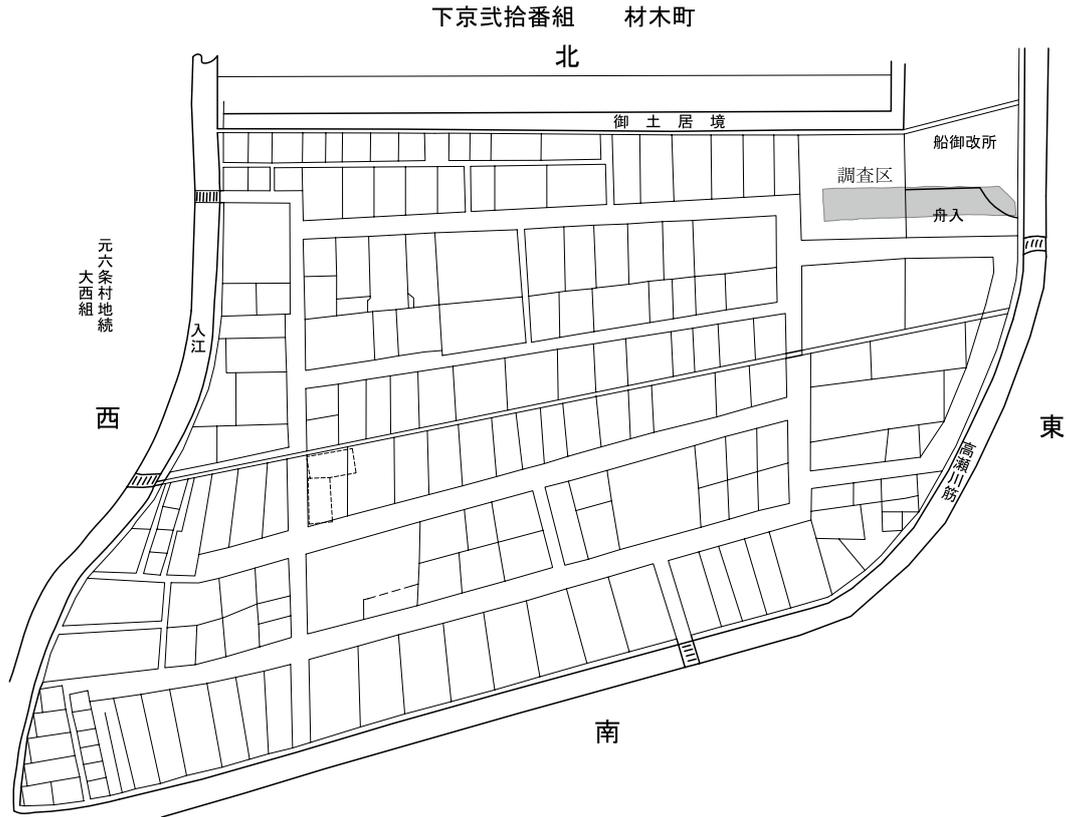


図24 明治4年調査地付近図  
 (『明治4年 六条村絵図』トレース図を元に、加筆・修正した。)

の交差点から七条高倉通までの区間の御土居は、北東から南西方向に斜行して描かれている。これが築造当初の御土居と考えられる。しかし、これ以降の絵図に描かれる同区間の御土居は位置を変える。元禄15年(1702)作成の『京都総曲輪御土居絵図』<sup>11)</sup>では、六条河原町以南の御土居は、河原町通-高瀬川間を南下し、七条通の南側で西折して七条高倉通付近で築造当初の御土居に繋がる。従って、17世紀中頃に御土居が付け替えられたことがわかる。付け替えは、寛永18年(1641)に造営された涉成園の造営に伴うもので、それまで御土居外縁に沿って流れていた高瀬川も現在の位置に付け替えられたと考えられている<sup>12)</sup>。寛永18年以降に高瀬川が付け替えられたとすれば、今回検出した舟入6の構築も寛永18年以降となろう。

調査区西半では、江戸時代後期の整地層とそれに伴う建物を検出した。宝永4年(1707)五条-六条間の鴨川河原付近に存在した六条村は、領主である妙法院から移転を命じられ、調査地点周辺に移る。従って、検出した整地層と建物は、この六条村移転を示す遺構と考えられる。六条村は、公役である刑警吏と皮革業という安定した仕事を持ち、村は庄屋にあたる年寄により厳しい統制がされていた。移転にあたり村から出した条件の中には、移転先が窪地で水が付きやすいため、3尺の地上げを行うことが挙げられており、そのため妙法院が土入れを行ったことが史料に記されている<sup>13)</sup>。

江戸時代後期の整地層は、厚さが3尺には満たないが、土入れに相当するものと考えられる。また石垣20は、建物2から建物1への建て替えなどを契機として、さらに積土が施される整地層の

土留ないし宅地境界の明示のために構築されたものと考えられる。それを裏付ける遺構として石垣直下の杭がある。杭の機能には2種が想定できる。一つは石垣敷設時の沈下防止用の下部構造、一つは石垣敷設前の宅地開発時の地上げに伴う護岸施設などが想定できる。

柳原銀行記念資料館館長の山内政夫氏には、資料の提供、ならびに様々なご教示を得た。記して謝意を表する次第である。

#### 註

- 1) 山田邦和「第3章 左京と右京」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 2) 石田孝喜「近世初期の洛中絵図に関する考察(四)・(五)」『月刊古地図研究97号・98号』 日本地図資料協会 1978年
- 3) 「4 史料近世1」『京都の部落史』 京都部落史研究所 1986年  
「5 史料近世2」『京都の部落史』 京都部落史研究所 1988年  
「京都柳原町史」『日本庶民生活史料集成 第十四巻 部落』 三一書房 1971年  
山本尚友「六条村小史」『柳原銀行とその時代』 崇仁地区の文化遺産を守る会 1991年
- 4) 六代目丹嘉大西重太郎監修・奥村寛純編著『伏見人形の原型』 伏偶舎 1976年  
森本勇矢『日本の家紋大辞典』 日本実業出版社 2013年  
丹羽基二『家紋大図鑑』 秋田書房 1971年
- 5) 永井久美男『新版 中世出土銭の分類図版』 高志書院 2002年  
永井久美男編『近世の出土銭Ⅱ』 兵庫埋蔵銭調査会 1998年
- 6) 『六条・七条新地絵図』 正徳三年(1713)写 京都府立総合資料館所蔵
- 7) 今村家文書研究会編『今村文書史料集 下巻 近代編』 思文閣出版 2015年  
今村家は江戸時代に柳原庄村の庄屋を務め、近代には戸長も務めた。中世から近代までの多くの文書を所有している。
- 8) 前掲註7
- 9) 『慶長・昭和 京都地図集成』 柏書房 1994年
- 10) 京都大工頭中井家作図の『寛永十四年洛中絵図』 寛永14年(1637)作成 宮内庁書陵部蔵。
- 11) 角倉家が御土居管理のために作成した『京都総曲輪御土居絵図』 元禄15年(1702)作成 京都大学総合博物館蔵。
- 12) 前掲註2
- 13) 前掲註3

表4 土器類一覽表

No.	器種	器形	遺構	法量			生産地	備考
				口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		
1	染付	椀	舟入6	10.9	6.3	5.8	肥前系	広東椀
2	染付	椀	舟入6	11.8	6.2	6.9	肥前系	広東椀
3	染付	椀	舟入6	11.6	6.5	6.4	肥前系	広東椀
4	染付	椀	舟入6	10.6	4.0	5.2	肥前系	見込蛇目釉剥
5	染付	皿	舟入6	13.5	4.6	8.0	肥前系	蛇目釉剥、矢羽文
6	染付	椀	舟入6	5.6	5.1	3.7	肥前系	筒型、石畳地文様
7	染付	椀	舟入6	8.0	6.1	6.0	肥前系	
8	白磁	小椀	舟入6	4.9	3.1	3.8	不明	
9	染付	蓋	舟入6	10.4	3.4		肥前系	
10	染付	蓋	舟入6	9.2	2.6		肥前系	煤付着、灯明皿転用か
11	染付	仏飯器	舟入6	7.0	6.5	3.6	肥前系	蛸唐草文様
12	染付	仏具 瓶	舟入6		(10.0)	4.6	肥前系	草花文様
13	施釉陶器	椀	舟入6	9.4	5.3	3.2	京・信楽系	小杉椀
14	施釉陶器	水滴	舟入6	1.2	5.2	4.2	京焼	青磁
15	施釉陶器	灯火具	舟入6		(3.9)	4.7	京・信楽系	
16	施釉陶器	灯明皿受け	舟入6	11.3	2.6	4.5	京・信楽系	
17	施釉陶器	灯明皿	舟入6	11.0	2.4	4.3	京・信楽系	
18	施釉陶器	蓋	舟入6	11.5	2.9		京・信楽系	
19	施釉陶器	鍋	舟入6	16.8	9.2	7.6	京・信楽系	鉄釉
20	施釉陶器	片口鉢	舟入6	13.8	8.6	7.2	京・信楽系	
21	施釉陶器	鉢	舟入6	15.6	9.6	7.6	京・信楽系	
22	焼締陶器	播鉢	舟入6	31.0	12.2	16.6	堺・明石系	
23	瓦器	火鉢	舟入6		9.7			列点文様
24	染付	皿	園池23	13.5	2.9	(7.1)	肥前系	蛇目釉剥
25	染付	壺	園池23		(7.4)	5.5	肥前系	唐草文様
26	施釉陶器	灯明皿	園池23	6.0	1.1	2.6	京・信楽系	
27	施釉陶器	灯明皿	園池23	10.9	2.4	4.6	京・信楽系	
28	施釉陶器	蓋	園池23		1.5	5.0	京・信楽系	
29	施釉陶器	鍋	園池23	15.8	(4.4)		京・信楽系	
30	施釉陶器	鍋	園池23	20.8	(7.5)		京・信楽系	
31	施釉陶器	鍋	園池23	20.7	(6.6)		京・信楽系	
32	焼締陶器	鉢	園池23	13.0	6.8	12.2	備前	匣鉢型
33	須恵質	鉢か	園池23	11.5	(11.5)			
34	焼締陶器	鉢	園池23	22.7	(9.7)			
35	瓦質土器	火鉢	園池23	13.6	(5.5)			脚部のみ、朱漆
36	染付	蓋	攪乱	4.6	1.1		肥前系	
37	焼締陶器	播鉢	第2面包含層	34.6	15.5	16.0	備前	

表5 その他の遺物一覧表

No.	種類	名称	遺構	法量(cm)	生産地	備考
土1	土製品	泥面子	地鎮25	長2.4、幅2.8、厚さ0.9	京・深草	大黒天
土2	土製品	泥面子	地鎮25	長2.0、幅1.6、厚さ1.1	京・深草	俵
土3	土製品	泥面子	地鎮25	長1.8、幅1.7、厚さ0.7	京・深草	袋
土4	土製品	ミニチュア	舟入6	高さ(1.9)、底径1.7	京・深草	急須
土5	土製品	伏見人形	舟入6	長7.6、幅2.8、高さ2.4	京・深草	鯉、土鈴
土6	土製品	伏見人形	舟入6	長5.1、幅(3.0)、高さ(4.1)	京・深草	狛犬、中実
土7	土製品	伏見人形	園池23	長5.3、幅2.8、高さ5.2	京・深草	鳩笛
土8	土製品	泥面子	舟入6	径3.0、厚さ0.9	京・深草	家紋、重ね扇文
土9	土製品	泥面子	舟入6	径3.0、厚さ1.1	京・深草	家紋、二引両文
土10	土製品	泥面子	舟入6	径3.1、厚さ0.7	京・深草	家紋、木目槌文
土11	土製品	泥面子	園池23	径3.1、厚さ1.0	京・深草	家紋、三つ銀杏文
土12	土製品	泥面子	園池23	径2.9、厚さ1.0	京・深草	家紋、三つ銀杏文
土13	土製品	泥面子	園池23	径2.8、厚さ1.9	京・深草	家紋、鶴文
土14	土製品	泥面子	園池23	径3.1、厚さ0.6	京・深草	「め」文字
土15	土製品	泥面子	園池23	径3.2、厚さ1.0	京・深草	不明
石1	石製品	砥石	整地層1	長(5.6)、幅7.6、厚さ1.9	京・鳴滝	側面全面に漆
金1	銭貨	天聖元寶	地鎮25	径2.2		宋銭
金2	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		古寛永通寶
金3	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		古寛永通寶
金4	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		「文」銭
金5	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		「文」銭
金6	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		「文」銭
金7	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.4		
金8	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.4		
金9	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.4		
金10	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.4		
金11	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		
金12	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		
金13	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		
金14	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		
金15	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.3		
金16	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.2		
金17	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.2		
金18	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.2		
金19	銭貨	寛永通寶	地鎮25	径2.2		
金20	銅製品	鋳	地鎮25	頭部径1.0、長3.4		頭部に鍍金
金21	銅製品	鋳	地鎮25	頭部径0.8、長3.4		頭部に鍍金
金22	銅製品	鋳	地鎮25	頭部径0.7、長3.1		頭部に鍍金
金23	銅製品	鋳	地鎮25	頭部径0.9、長3.1		頭部に鍍金



# 圖 版





1 第1面全景（西から）



2 第2面西半全景（西から）



1 地鎮25遺物出土状況（南から）



2 土坑13（南から）



3 園池23（北から）



1 石垣20 (北東から)



2 舟入6 (南西から)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼうきゅうちょうあと・おどいあと							
書名	平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2015-11							
編著者名	近藤 章子							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 おどいあと 御土居跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 ごうのちよう 郷之町  ほか地内	26100	1  149	34度 59分 19秒	135度 45分 55秒	2015年8月 17日～2015 年9月25日	162㎡	道路整備 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡  御土居跡	都城跡  土塁跡	江戸時代後期 ～明治初頭	建物跡、土坑、園 池、石垣、舟入、 井戸	土師器、染付、施釉陶 器、磁器、焼締陶器、 伏見人形、泥面子、瓦、 石製品、金属製品、骨		調査区東半部で高 瀬川の舟入、西半 部で江戸時代後期 の建物跡や漆喰の 園池を検出。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-11

## 平安京左京八条四坊九町跡・御土居跡

発行日 2016年3月31日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961